

午組卜辞の再分類

石川大我

緒論

殷代史研究の根本資料である殷墟甲骨文は、「王卜辞」と「非王卜辞」に大別される。王卜辞は「自組」・「賓組」・「歴組」・「出組」・「何組」・「無名組」・「黄組」、およびそれらの中間的な特性を備える幾つかの小群が存在し、また出土坑の位置の偏りから「村北系」と「村南系」の二系統が確認されている。非王卜辞は「子組」・「午組」・「婦女類」・「異卜類」・「花東子類」・「円体類」・「劣体類」・「屯西類」・「刀卜辞」¹⁾、および総数が10片以下の小群²⁾が存在する。

このうち、午組については、2012年の『村中南』刊行などによって資料数が増加していたにもかかわらず、2020年ごろまで研究は低調なままであり、その間に発表された学術論文や専著の内容も決して質が高いとは言えない状況にあった。さらに、各研究者の間でどの甲骨片が午組に帰属するかについて見解が定まっていなかったこと、そして研究者ごとの見解すら明確に示されていないことが、研究上の重大な障害として存在していた。当然ながら、ある刻字甲骨群の研究を行うためには、まずどの甲骨片がどの組類に帰属するものであるかを判別した上で、数量を確定させる必要がある。そして、その作業を怠った上でなされた研究は、厳密な学術的批判に耐えうるものには決してなりえない。そのような状況の中で、午組卜辞の全面的な材料整理をおこなった成思遠 2021 は、非常に重要な研究史上の意義を持つ論文と評価できる。ただし、その分類は大筋では妥当であるものの、提示された結論については不正確な部分が存在する。そのため、この論文では、以下の二章と附録によって、午組卜辞の再整理を行う。

第1章「先行研究」では、上述した研究史と主要な先行研究を可能な限り正確に整理したうえで、成思遠 2021 の研究手法と結論について詳細に検討し、この論文で解決すべき課題を提示する。

第2章「再分類」では、2022年3月時点で公開・公開済の著録書とウェブサイトとを可能な限り蒐集し、午組卜辞の再分類の作業を行い、より妥当な分類案を提示する。具体的には、現時点における午組卜辞の数量を確定させること、付属する小群の特徴が自組と密接な共通性を具有しているという事実を証明すること、旧来の「午組」を細分し名称をより適切な「午類」「自午間類」と改めること、以上三点をもって、午類卜辞の研究の基礎を形成する。

附録「午類卜辞材料来源表」では午類卜辞の著録状況・出土情報を整理することによって、この論文における研究の内容を補正する。

また、本論文における殷墟甲骨文の分類については、自組は彭浩喆 2020³⁾、賓組は王建軍 2019⁴⁾、歴組は劉風華 2014⁵⁾、無名組は馬智忠 2018⁶⁾、花東子類は蔣玉斌 2006b と『花東』に、花東子類と午組以外の非王卜辞は楊軍会 2019 に依拠し、これらが参照していない著録書・ウェブサイトのもの、その資料の分類に依拠した。私見がこれらと異なる場合はその根拠を示した。なお、上記組類以外の名称については、原則的に黄天樹による命名を採用している。

凡 例

記号	意味
()	隸定字と原字・補足
[]	釈字・詞義
Ⓛ	組類
□	欠字（一文字）
…	欠字（字数不明）
Ⓛ	欠字の補充
+	実綴
~	遙綴
/	正面・反面

第 1 章：先行研究

第 1 節：午組卜辞の専門研究

殷墟甲骨文の分類を主題とする論文では、研究史を仔細に回顧し、その研究の位置付けを示すことが一般的⁷⁾であるが、王卜辞を取り扱う多くの先行研究と異なり対象となる範囲が狭い本論文では、午組に絞って論じることとする。まず本節では、黄天樹 1998・蔣玉斌 2006b・劉一曼 2011a・黄天樹 2017・楊軍会 2019 によって解明されている午組の基本的な情報を整理することで、議論の前提を形成したい。整理したものが以下の五点である。

- 属 性：非王卜辞。
- 貞 人：署名なし。
- 材 質：亀骨併用。亀甲を多用し、腹甲を専用する。
- 数 量：250 片前後。
- 出土坑：村北と村南の双方から出土。

また、午組の字体⁸⁾の特徴については、以下のことが知られている。

- ① 筆画の末端が鋭く尖った斜筆の多用。特に左下方向が多い。
- ② 折筆の多用。
- ③ 縦画の延伸の多用。
- ④ 「乙」「申」「妣」などの字を「Z」ではなく「S」の形で契刻する「S式」の多用。
- ⑤ 「卜」の横画が兆枝と同方向。時計回りに 90 度回転することもある。
- ⑥ 標準的な字体の A 群のほか、B 群・C 群・D 群・E 群が存在。

このほか、記述や鑽鑿の形態の特徴については、以下のことが知られている。

- ⑦ 祭祀の「侑」や有無の「有」は「出」を多用し、「又(丩)」はほとんど使わない。
- ⑧ 否定詞は「弔」を頻用。「不」を使うこともある。「勿」はほとんど使わない。⁹⁾
- ⑨ 異体字の使用が頻繁にみられる。
- ⑩ 兆序字の位置形式はB式をとることが非常に多い。¹⁰⁾
- ⑪ 腹甲卜辞で対貞する際はそのほかのグループと異なり左側を正卜とする。
- ⑫ 版上に円形の削痕が存在する例がある。自組と共通。¹¹⁾
- ⑬ 鑽鑿の形態が自組と類似。

以上の特徴は、ある甲骨片が午組であるか、それ以外の組類に帰属するかを判断する基準となりうる。特に字体は最も重要な基準であり、既に蔣玉斌が①と②から演繹して「鼓腹的貞、尖底的其、折足的于、折秘的戊戌等字、都是本類才有的写法。」¹²⁾と午組の特徴字体を簡潔にまとめているが、これについては後述する成思遠 2021 でより詳細に明確化された事柄でもあるので、ここでは贅述しない。

最後に、午組の製作時期については、黄天樹 1998 などのように武丁時代の中期とみる見方が通説であり、これに従う。劉一曼 2011a のように坑位・人物・鑽鑿の形態が自組に近いことから、武丁前期であるという見解も存在するが、合集 22043「丁未卜貞、令戊・光有獲羌芻五十。」【午組】、合集 94「甲辰卜亘貞。今三月光呼来。王占曰其呼来、迄至惟乙。旬又二日乙卯、允有来自光以羌芻五十。」【賓二類】¹³⁾のように、午組と賓二類には同一の事件を取り扱った卜辞が存在するので、従うことはできない。しかしながら、午組と自組に共通する要素が存在すること自体は注目すべき要素であり、本論文の第2章で詳述する。

第2節：午組卜辞の研究史

本論文では約20編におよぶ午組の専門研究の経過を、科学発掘により所得された刻字甲骨の著録書の刊行と、字体分類に関係する主要な論文の発表を基準として以下の四段階に分割する。

第一段階は、『甲編』・『乙編』刊行から『屯南』刊行までの期間である。本段階は、1928年～1937年の殷墟発掘で所得された甲骨を利用した午組研究の草創期である。董作賓 1932・陳夢家 1956・李学勤 1958・前川捷三 1976・林澧 1979 が発表されている。特に、陳夢家 1956 が「午組」を命名しその基本的な情報を解明したこと、林澧 1979 が非王卜辞を「子卜辞」として再解釈し、以降の研究の道筋を作ったことが本段階の主な意義である。

第二段階は、『屯南』刊行から2005年までの期間である。本段階は、『屯南』所収の新発見の午組卜辞によって研究が進展するとともに本格的な分類が開始した時期であり、肖楠 1979¹⁴⁾・陳建敏 1985・彭裕商 1986・方述鑫 1992・李学勤・彭裕商 1996・黄天樹 1998・魏慈德 2001・楊郁彦 2005 が発表された。代表的な研究は黄天樹 1998 である。これは字体による分類を基礎とし、午組の記述内容の総括をおこなったものである。

第三段階は、蔣玉斌 2006b の発表から『村中南』刊行までの期間である。本段階は、蔣玉斌 2006b によって分類研究が徹底され、当時の「午組」の定義が明確になった時期である。蔣玉斌

2006bの主要な成果は彭裕商・黄天樹の研究を踏まえた上で、執筆時点で著録済であった甲骨の中から非王卜辞を全て再分類したこと、字体の特徴だけではなく兆序字の位置などを分類基準として導入したことの二点であるが、特に午組については、典型的な字体群をA群とし、規律から外れた字体群をB群・C群・D群・E群に細分化¹⁵⁾したことは、極めて重要な成果である。このほか、劉風華 2014¹⁶⁾、莫伯峰 2011、楊軍会 2019¹⁷⁾も本段階に該当する研究ではあるものの、午組の研究については蔣玉斌 2006bと比較してより優れた知見を提示しているわけではない。

第四段階は、『村中南』刊行から2020年までの期間である。本段階は、『村中南』所収の新発見の午組によって関連する研究が僅かに進展したものの、分類基準が不明瞭なまま放置されていた時期であり、劉一曼 2011a・方美霞 2015・韋心滢 2017・左勇 2019が発表された。これらは、蔣玉斌 2006bの分類成果と『村中南』の分類の摺り合わせをしないまま議論を進めているという共通の問題点を抱えているが、それ以外にも個別の評価点と問題点が存在する。

まず、劉一曼 2011a¹⁸⁾は『村中南』所収の午組卜辞を利用した最初の論文であり、午組の祭祀・家族・軍事などに新たな知見を示したことが評価できるが、いずれも初歩的な検討に留まっている。方美霞 2015はタイトル通り『村中南』の午組に限定して研究をおこなったものだが、実質的には劉一曼 2011aと朱岐祥 2013の成果を複合させただけの論文であるため分類には変更がなく、新たな知見を十分に提示できていないことが欠点である。韋心滢 2017は劉一曼 2011aの議論を更に発展させようとはしてはいるものの、全体的に低質である。先行研究を軽視し、独自の説を展開している箇所が多数¹⁹⁾存在するため、ほぼ参考とはならない。左勇 2019は村中南 297の記述を根拠とし、午組卜辞に特有の祖先称谓である「入乙」について、その配妃が殷王の小乙・祖乙・大乙のいずれとも異なることを指摘するとともに、入乙は商王ではなく午組の占ト主体の祖輩あるいはそれ以上の男性祖先であると推定した。研究自体は優れているが、劉一曼 2011aと同様に初歩的な検討に留まっている。

第五段階は、成思遠 2021の発表以降の期間である²⁰⁾。本段階は、『村中南』刊行以降、長らく「午組」の定義が曖昧であった状況の中で、成思遠 2021が全面的な整理を行うことによって、従来よりも格段に正確かつ精密な研究の実施の可能性が示された時期であり、本論文もこの段階に該当する。成思遠 2021の研究成果を簡潔に整理し、その評価点と問題点を明らかにすることは重要であるため、ここではやや多めに紙幅を割いて説明を行う。

まず、構成は以下の通りであり、括弧内は参考とされている資料である。

- 緒論
- 第一章「午組卜辞字跡研究」(張世超 2002、蔣玉斌 2006b、『村中南』)
- 第二章「午組卜辞的辞例形式」(黄天樹 1998、蔣玉斌 2006b)
- 第三章「午組卜辞内容研究綜述」(黄天樹 1998、張志強 2016、韋心滢 2017)
- 結語
- 附録一「午組卜辞积文」
- 附録二「午組卜辞材料来源表」

このうち、第二章・第三章は先行研究と比較して新しい知見を提示できていないため、最も重要

なのは第一章における論証である。第一章では本章において蔣玉斌のA群・B群・C群・D群・合集22067（E群）という枠組みを踏襲したうえで、A群の更なる細分化が実行されている。その主要な基準は「戊」・「戌」・「歳」の字形内の「出頭」「折秘」「岐筆」という要素であるとしている。すなわち、「出頭」は中段の横画が縦画を貫通しているか否かを、「折秘」は縦画部分が直線か否かを、「岐筆」は上段の短い横画が中段の横画に対して平行か否かに注目した基準である。この基準の導入によって、成思遠2021はA群を1類と2類に分割すること、1類を早期と後期に区別すること、各類の特徴字を明確化することに成功している。その成果をまとめたものが下表である。²¹⁾

	1類（早期） ²²⁾	1類（後期）	2類
「戊」	𠄎		𠄎
「歳」	𠄎 𠄎		𠄎 𠄎
「貞」	𠄎	𠄎	𠄎
「庚」	𠄎 𠄎		𠄎 𠄎
「于」	𠄎	𠄎	𠄎
「妣」	𠄎		𠄎
「𠄎」	𠄎		𠄎
特徴	斜筆の風格が最も明顕。 「庚」「未」「𠄎」などが細く縦長。		縦画の延伸を好む。 欠刻が多く、横画に顕著。

また、以上のことから、A群の契刻者が1人ではなかった可能性を指摘する一方、A群1類（後期）とA群2類の判断が難しい例として下表の数例を挙げ、その帰属先を判定している。

	1類の特徴字	2類の特徴字	判定結果
合集22046	多い	少ない	1類
合集22065	両類の特徴字が同数ほど存在。		2類もしくは共版
合集22074	多い	少ない	1類
合集22099	少ない	多い	2類

このほか、A群の細分化から得られた知見によって、B群・C群・D群・合集22067についても再検討をおこなっている。すなわち、B群はA群両類の特徴を持つが、特に2類の影響を受けた初習者の作品であり、C群はA群2類の契刻者の作品であり、D群は自組大字類の影響を受けたA群2類の契刻者の作品であり、合集22067は字体が自組小字類と近似しており一部の卜辞は午組ではなく自組小字類の契刻者の作品の可能性のある片である、という説を提示している。本人は言及していないものの、この説は乙編1428（合集22187）と乙編6690（合集22094）が午組と自組の同版例であるとした肖楠1979、合集22093・合集22094²³⁾が午組と自組肥筆類に似た字体が同版であるとした黄天樹1998、合集22206+合集22187の研究を通じて午組が自組小字類の影響下にあったと推定した魏慈徳2001²⁴⁾、C群が自賓間類と類似するとした蔣玉斌2006b、午組の坑位・人物・鑽鑿の形態が自組に近いと指摘した劉一曼2011aと一脈通じる発想である。

さて、成思遠 2021 に対する評価点は以下の三点に集約できる。

一、A 群の細分化の成功。後述するように少なくない修正は必要であるものの、概ね妥当な見解を提示している。

二、午組の特徴字の明確化の成功。各字について個別にそれらが有する特徴を示しており、筆画の方向や形態を徹底的に分析・分類した崎川隆 2011 ほど精密ではないものの、蔣玉斌 2006b・莫伯峰 2011・楊軍会 2019 などの研究と比較すれば優れていることは疑いない。

三、午組の全面的な整理の成功。修正が必要な部分こそあれ、『村中南』の利用も含めて研究史上の意義は非常に大きい。また、蔣玉斌 2006b 発表以降に出版された『上博』所収の午組を新発見したことも高く評価できる。

以上のように、成思遠 2021 は、午組卜辞の研究における画期的な論文であることは間違いないが、同時に少なくない問題点も抱えており、以下の六点が存在する。

一、2010 年代以降の主要な先行研究の見落としと、それに伴う既知の事柄の誤解や再生産が少なくない点。具体的には、前掲した劉一曼 2011a²⁵⁾・劉風華 2014・方美霞 2015・楊軍会 2019²⁶⁾ は参考資料とされておらず、左勇 2019 は参考資料とはされているものの肝心の本文に研究成果が反映されていない。²⁷⁾ 具体的なミスは注に示した通りであるが、当然ながらこれこそが第二章・第三章の記述にめばしい新奇性が看取できない原因である。該当する箇所については修正・増補が必要だろう。

二、参考資料とする蔣玉斌 2006b・莫伯峰 2011 の間で午組に帰属させるべき甲骨片について意見の相違がある場合、帰属先の変更についてその理由が述べられていない点。「整理与研究」と題して研究する以上、既存の説と異なる見解を提示する場合は、その根拠と論証の過程を示すことは当然であるが、それが欠けている。これは、多くの殷墟甲骨文の分類研究に共通する問題点ではあるものの、午組は他の組類と比較して数量が多いわけではないのだから、その程度の記述を怠ることは本来あってはならない。

三、綴合の詳細な典拠が示されていない点。これも類似研究の大半に共通している問題点だが、ある複数の甲骨片の綴合について、それが誤った綴合であるか否かを確認するため、あるいは綴合の根拠を知るためにも、綴合者の表示のみでは不十分である。²⁸⁾

四、調査対象となっている著録書・ウェブサイトの数が不足しており、そのため「午組卜辞材料来源表」における甲骨片の著録状況の情報が不完全になっている点。重複片の排除は言うまでもなく、特に分類研究においてはより鮮明な拓本か写真、可能ならば実物を参照することが望ましい。実物は種々の制約によって参照することが不可能である場合が多いものの、良好な資料を搜索するために各著録書およびウェブサイトの登録番号を一覧化することは必須である。この点については、以前と比べて参照すべき史料が増加しているにもかかわらず、類似する作業を実施していた蔣玉斌 2006b と比較しても進歩が見られず、むしろ後退していることは大きな過失である。具体的には、次章で挙げる国博 88 のような、ごく簡単に午組に帰属させうる片を見落としていることが、成思遠 2021 の調査と整理が不足していることを端的に示している。

五、A 群の 1 類・2 類の契刻者は複数とは限らないという点。そもそも成思遠 2021 が合集 22046・合集 22065・合集 22074・合集 22099 などを挙げて示すように、1 類後期・2 類の特徴字が混淆している例は存在する。この他にも、村中南 308 では斜肩「庚」（1 類）と横画傾斜・折足「于」

(2類)が同条の卜辞に出現している。さらに、1類では「午」「禦」に填実式「𠄎」「𠄏」²⁹⁾と虚廓式「𠄐」「𠄑」の両方が存在するが、2類では虚廓式のみとなっている。³⁰⁾これは張世超 2002 が夙に指摘しているように、甲骨文字の簡化現象の代表例であり、ある特定の組類内の製作時期の早晚関係を示す基準とみなしうる。以上から、A群の1類・2類は、契刻者が複数人存在したことではなく、同一人物の契刻技術が変化したことを反映した区分とみる方がより適切であろう。もしそうであるならば、そうした変化の理由についてより合理的な説明を追加することが必要となるだろうが、当然それは本論文が実証すべき課題であるので、後述する。

六、午組卜辞の研究にあたって自組との関連性をそれほど重視していない点。複数の研究者が午組と自組の共通点について触れていること、成思遠 2021 もD群および合集 22067 と自組との関連を指摘していたことは前述の通りである。しかしながら、この特徴は午組卜辞が同時代に存在した非王卜辞の中でどのような位置付けとなるのかを解明する鍵となりうる要素であると考えられ、軽視することはできない。より詳細な検討を要する。

第3節：課題

前節で述べた先行研究の評価点・問題点を踏まえると、本論文で解決すべき課題、および解決方法は以下の二点に集約される。

第一の課題は、成思遠 2021 をベースとした午組卜辞の再分類であり、次章で取り組む。この課題の目的は、再分類の作業を厳密に行い、午組卜辞の研究の基礎を形成することである。この課題の解決は、先行研究によって提示された午組卜辞に関する基礎的な知識を応用し、既知の特徴字体と契刻習慣の特徴を主要な基準としたうえで、成思遠 2021 の分類結果に対して訂正 6 例、削除 9 例、追加 9 例、合計 24 例の修正を加え³¹⁾、その数量を改めて確定させるとともに、自組卜辞との共通点の整理を通じて、より妥当な午組の小群の性質の把握、および再命名によって達成する。

第二の課題は、附録の製作である。この課題の目的、および具体的な解決方法については、既に緒論で述べた通りである。

第2章：再分類³²⁾

第1節：訂正

1. 合集 15277 + 合集 21874

本例にはやや複雑な先行研究の経緯が存在し、解説と修正が必要である。まず、蔣玉斌 2006b は「乙種子卜辞材料総表」³³⁾で合集 15277 (乙編 3928) + 合集 21874 (乙編 2062) + 乙編 7865 とするが、この三片を綴合した論文は発表されておらず、典拠不明である。楊軍会 2019 はこれを追認しているが、同様に典拠は示されない。また、蔣玉斌 2010b・蔣玉斌 2011 は第 206 組 (『《甲骨文合集》綴合拾遺」49 組) で合集 15277 (乙編 3928) + 合集 21876 (乙編 2062) としているが「《甲骨文合集》綴合拾遺」13 組～54 組は先秦史研究室ウェブサイトでは該当論文が発表されておらず、そもそも合集 21876 は蔣玉斌 2006 では円体類に分類されている。成思遠 2021 は合集 15277 + 合集 21874 のみを記載する。

以上のように状況は混迷を極めていますが、『来源表』を参照すると合集 15277 = 乙編 3928、合集

21874 = 乙編 2062、合集 21876 = 乙編 1324 であり、乙編 7865 は『合集』に収録されていない。さらに、甲骨片の形状から推測すれば、綴合可能であるのは合集 15277 + 合集 21874 のみだろうが、乙編 7865 が綴合不可能な理由を明示しなければ、合集 15277 + 合集 21874 が午組に帰属することの完全な証明とはならない。

そこで、「史語所数位典藏資料庫整合系統」で調査した結果、乙編 7865 は R44560 の一部であることが判明した。該片は真人署名「賓」、契刻されている文字の字体、兆序字の位置形式、いずれの要素をとっても疑いなく賓組であり、乙編 7865 の綴合部分も不自然な点は存在しない。

ゆえに、合集 15277 + 合集 21874 のみ午組に帰属させるべきである。

2. 合集 18439 + 合集 22106 + 合集 22111 + 乙編 1851、合集 22078

本例は蔣玉斌 2010c : 第 92 組 (蔣玉斌 2011 : 第 282 組) であり、成思遠 2021 もこれを踏襲しているが、実際には合集 22078 (A) と合集 18439 + 合集 22106 + 合集 22111 + 乙編 1851 (B) は綴合不可能である。理由は以下の三点である。

一、行款が異なること。A の右半分は左行であるが、B は右行である。

二、字体が異なること。A には「𠄎」(1 類)・「𠄎」(1 類 (後期)) が存在するが、B は「𠄎」・「𠄎」(2 類) が刻まれている。確かに、1 類 (後期) と 2 類の混淆例が存在することは事実だが、ここまで明確に区別できる例は珍しい。

三、そもそも A と B の間に空白が看取できるということ。蔣玉斌 2010c : 第 93 組は史語所によって合編資料として新号 (ZR44639) が与えられているが、同じく A と B が所蔵品である本例には特に修正が実施されていないことも、実際には綴合不能であることを示唆する。

以上から、A と B が典型的な午組 A 群であることは疑いがないが、綴合は不可能であることが理解できる。

3. ZR41126、乙編 9038

成思遠 2021 は合集 22467 を収録しているが、誤りである。合集 22467 は乙編 9036 + 乙編 9037 + 乙編 9038 だが、謝湘筠 2007・第 16 組の実験の通り、乙編 9036 + 乙編 9037 のみ綴合可能であり、これにも新号 (ZR41126) が付与されている。³⁴⁾

以上のことから、合集 22467 は ZR41126・乙編 9038 の二片として収録するべきである。

4. 合集 22079 甲 + 合集 22101 左 + 合集 22129 ~ 合集 22079 乙、合集 22437 + 乙編 975 + 乙編 1458 + 乙編 1827、合集 22439

本例は複数の甲骨が関係する綴合であり、表記の簡略化のため以下の記号を使用する。

- A : 合集 22079 甲
- B : 合集 22079 乙
- C : 合集 22101 左
- D : 合集 22129
- E : 合集 22437

- F : 合集 22439
- G : 乙編 975
- H : 乙編 1458
- I : 乙編 1827

諸家の綴合案を整理すると下表のようになる。

著録号	綴合
殷綴 416	E + G ~ F
魏慈徳 2001	C + D ~ E + F + G
蔣玉斌 2006a・第 7 組 (ZR28688)	A + C + D ~ B
蔣玉斌 2011・第 204 組	E + F + G + H
R28128	C + D ~ E + G
ZR28128	E + G + H + I ~ F

成思遠 2021 は、このうち蔣玉斌 2006a・第 7 組と蔣玉斌 2011・第 204 組の説を採っている。A + C + D ~ B については異論がないが、E + F + G + H は F の形状からみて実綴不可能であり、なおかつ ZR28128 = E + G + H + I ~ F については遙綴部分の F を分離すべきである。根拠は字体の相違である。

具体的には、ZR28128 のカラー図版を確認する限り、F が「盧 (𠂔)」 「羊」 「貞」 (方耳・平腹) の字体・刻跡、および兆序字の位置形式から典型的な午組 A 群 2 類であると考えられるのに対し、E + G + H + I に刻まれている文字のうち「歳」と「夷」の字体そのものは午組の特徴を有しているものの、前者の刻跡は筆画の末端が尖鋭でない工整なもので、後者の輪郭部分は非常に円潤であり、いずれも午組に類例を見ないものだからである。さらには、「于」「用」「庚」は曲線が多用されており、また「𠂔」の横画が F のものと比べて一本不足した「𠂔」となっている。

以上のことから、E + G + H + I と F は別々の契刻者による作品であるとともに、遙綴も不可能であろうと結論できる。また、このほか注目すべきは、E + G + H + I の文字は字体こそ午組に近似しているものの、契刻技術は自組小字 B 類に極めて接近しているという点である。これこそ、前章で触れた午組と自組の共通性を示す好例であり、本章・第 3 節でも 20. 合集 22301 と 21. 綴三 609 の項目で類似例について詳述する。

5. 英国 1916

以下示すように、本片が有する四点の特徴はいずれも D 群と一致する。

- 一、「祖丁」の字形が合集 22184 と一致していること。
- 二、拓本からは文字のほかに界線が看取できるが、A 群にはこの現象がみられない一方で、合集 22184 と綴集 310 には存在すること。
- 三、本片の材質が獣骨³⁵⁾であり、これも合集 22184 と綴集 310 と共通すること。
- 四、『英国』所載の顕微鏡写真を比較すると、英国 1920 の「𠂔」の先端は鋭く尖った契刻がなさ

れているのに対して、英国 1916 の「寅」はそうではないことが看取できること。

以上から、本片はA群ではなくD群に帰属させるべきである。

6. 存補 2.81.2

英国 1916 と同様、これもD群に帰属させるべきである。折秘「歳」、上部横画増加「庚」³⁶⁾は午組の特徴字であり、円形の削痕も午組の特徴であるため、午組であること自体は疑いない。しかしながら、契刻されている文字はいずれも曲筆を多用した円潤な書体で、D群と共通する。また、材質は獣骨であり、界線も看取できる。

第2節：削除

7. 合集 22188

本片は午組ではない。根拠は以下の四点である。

一、本片の「于」がA群1類（早期）の特徴字であるが「庚」はA群2類の特徴字であること。

二、午組卜辞の「祖庚」で合文を用いるのは合集 22044 のみだが、それとは字体も構成部品の位置も異なること。

三、夙に巖一萍 1959 が「祖丁上冠数字始於三期」と指摘するように³⁷⁾、基本的に「n 祖某」は歴無名間類以降の王卜辞で、同干の殷王の区別を目的に用いられる称谓であり、非王卜辞や武丁期の王卜辞には使用されないこと。より具体的には、合集 27180「乙亥卜、蒸鬯三祖丁牢王受祐。吉」【無名二B類】、合集 27340「庚戌卜、其侑歳于二祖辛夷牡」【歴無名間二類】、合集 32658「辛亥卜、其侑歳于三祖辛」【歴無名間一類】などの例が挙げられる。

四、午組で「三祖庚」を祭祀するのは不自然であること。仮に本片の三祖庚が殷王である場合、屯南 2118+村中南 468 で「南庚」と、屯南 2671 で「盤庚」と表記されていることについて整合性のある説明をする必要があるが、管見の限り先行研究でそれをおこなったものはない。また、殷王ではない場合でも、午組で「n 祖某」や「二祖庚」は未確認であることについての説明が必要であろうが、同様にそれはなされていない。

8. 合集 22030 + 合集 22356

本例は史語所綴合であり、登録番号は R38235。蔣玉斌 2006b と楊軍会 2019 は合集 22356 を午組とする一方、合集 22030 については言及をしていない。また、莫伯峰 2011 は合集 22356 の分類は蔣玉斌 2006b を踏襲する一方、合集 22030 を劣体類とするが、根拠は不明である。しかしながら、成思遠 2021 は本例を午組であると考えに足る根拠を示していない。

按ずるに、本例に午組の特徴字は一文字たりとも存在せず、兆序字「一」「四」の位置もA式であるため、午組に帰属させることはできない。具体的な帰属先は待考。

9. 合補 49

成思遠 2021 は見落としているが、本片も史語所によって綴合がなされており、乙編 958+乙編 1139（合集 16256）+乙補 718（合補 49）+乙補 729+乙補 874=R28108 である。R28108 の構成部品のうち、諸家の帰属先の認定は下表の通りである。

	合集 16256	合補 49
莫伯峰 2011	賓早兼類	午組
崎川隆 2011	賓組一類	×
王建軍 2019	賓組二類	賓組一類

R28108 には賓組貞人「古」の署名がみられ、文字はいずれも賓組一類の特徴字である。そのため、R28108 は賓組一類であり、当然その一部である合補 49 も午組ではない。

10. 合集 39555

11. 合集 40910

両片は『合集』13 卷所収の模本であり、『来源表』によると前者は台湾国家図書館の、後者は狩野直禎の所蔵品である。ともに『搜聚』には未収であり、現在までに拓本や写真が公開されたことはない。

さて、殷墟甲骨文の分類にあたっては字体が主要な基準となることは再三述べてきた通りであるが、その前提に立つならば、原版を正確に転写しているとは限らない模本に対する分類作業は、そもそも正確な結果を出すことが無理であるので、研究の意味が無いか、極めて限定的である。特に、午組については、転折している筆画が曲筆であるのか折筆であるのか、筆画の末端が尖鋭であるか否かが補助的な判断材料となりうる場合があるが、模本でそれを確認することは不可能である。

くわえて、両片は少なくとも模本上では午組の特徴字が皆無であり、合集 39555 の「大乙」と合集 40910 の「王」はいずれも午組では用例が皆無である。³⁸⁾ 以上から、本論文では両片を午組には帰属させない。

12. 屯南 2242

本片は「甲」³⁹⁾「申」および「歳」らしき文字の三字が存在するが、いずれも午組の特徴字ではない。本片の「」は合集 20852 の「」とほぼ一致しており、自組に帰属する可能性が高い。⁴⁰⁾

13. 村中南 299

本片は『村中南』整理者が午組とみなしたものであり、鑿型は自組・午組・一期卜辞に特有の IA 式・IC 式⁴¹⁾ である。成思遠 2021 は本片について「此版甲骨字跡拙劣、部分筆画重刻多次、似初習。」(p.86) とするが、初習であるなら初習であるで、具体的にどの文字が午組の特徴字であるかを明示しなければ片手落ちの論証である。実際には、「庚申卜𠄎」の字形はいずれも丸みを帯びており、午組の特徴字ではないため、午組に帰属させることはできない。ただし、自組とも類似しないため、具体的な帰属先については待考。

14. 村中南 355

本片も『村中南』整理者が午組とみなしたものであり、鑿型は自組・午組・一期卜辞に特有の IA 式・IC 式である。同様に、成思遠 2021 も「午組「卜」朝向基本与兆枝同向、極少例外。由於

此版字跡較為拙劣。刻写深淺不一、帶有墨書痕跡、似初習。」(P.89)とする。本片も村中南 299 同様、熟練者ではない人間によって製作されたことまでは理解できるが、以下に示す五つの特徴は、それぞれが自組・午組・歴組のものと完全には一致しないため、帰属先を判定することが極めて難しい。

第一に、兆序字の位置がB式である。これは午組の特徴のひとつだが、同様の特徴を持つグループには歴組一類の大部分・円体類・劣体類・黄組が存在する。円体類・劣体類・黄組はこのような字体で契刻されない。

第二に、午組の「戊」の特徴のひとつは折秘だが、本片もそのような字体となっている。しかしながら、折筆で契刻されてはならず、合集 33076・合集 34229【歴一B】の「戊」のように歴組一類にも折秘に近い字体の例がある。

第三に、午組の「牛」は強烈に内折しているが、本片の「牛」の角は非常に丸みを帯びた形で刻まれている。これは合集 20668【自組小字類】や合集 21120【自組肥筆類】には存在する例であるとともに、基本的に「牛」の角を直角で表現する歴組ではありえない。

第四に、午組の「大」などの膝部分は角張った折筆で表現されているが、本片の「大」の足は緩やかに延伸されている。これは自組では「大」や「扶」にみられる特徴であり、前者の例は合補 6545【出類】・合集 19779【自組小字B類】、後者の例には合集 21054【自組小字B類】合集 21337【自組小字類】などがある。歴組では概して「大」は短足である。

第五に、歴組が世系上で遠い位置にある先王に対して「禱禾」を実施することは不自然ではない。⁴²⁾ その一方で自組と午組にそのような用例はない。

以上をまとめると、下表のようになる。少なくとも、本片を午組に帰属させることは現時点では不可能である。

	自組	午組	歴組
鑽型	○	○	×
兆序字	×	○	○
辞例	×	×	○
「戊」	×	△	△
「牛」	○	×	×
「大」	○	×	×

15. 英国 1921

本片は『英国』整理者が午組とみなしたものであり、蔣玉斌 2006b・成思遠 2021 はこれを踏襲している。本片に契刻されている文字のうち、「戊」「戊」「于」は午組の特徴字ではなく、「徴」は他に用例が確認できず、「川」を「𠄎」に作る例も午組には存在しない⁴³⁾。そして、最も注目すべきは「牛」を「𠄎」に作っていることであり、この字体は午組の特徴と明確に反する。午組における「牛」は通常「𠄎」⁴⁴⁾であり、例外は「𠄎」⁴⁵⁾、「𠄎」⁴⁶⁾である。また、午組における「牢」は通常「𠄎」⁴⁷⁾「𠄎」⁴⁸⁾であり、例外は「𠄎」⁴⁹⁾、「𠄎」⁵⁰⁾、「𠄎」⁵¹⁾、「𠄎」⁵²⁾である。注釈に示したとおり、こういった例外字はそれ以外の要素で午組卜辞に帰属させうる根拠を有する片に刻まれている。

るものであるので、本片とは性質が異なる。

以上のことから、本片は午組に帰属させるべきではない。

第3節：追加

16. 合集 19136 + 乙編 1785

本例は蔣玉斌 2006b「乙種子卜辞材料総表」には未収であるが、p.225 では第 38 組の新綴とされており、蔣玉斌 2011 でも第 76 組とされている。このほか、崎川隆 2011 は合集 19136 を自賓間類とし、莫伯峰 2011 は「19136+」⁵³⁾ を自賓間類とし、王建軍 2019 は「黄拼 19136 + 乙 1785」⁵⁴⁾ を賓一類とするが、楊軍会 2019 は午組としており、成思遠 2021 は未収である。

按ずるに、綴合に問題はない。また、カラー写真である R28265 と R29067 を確認する限り「母」「妣」はともに午組の特徴字である。よって、本例は午組に帰属させるべきである。

17. 合集 22052

本片は蔣玉斌 2006b・楊軍会 2019・成思遠 2021 は未収であるが、莫伯峰 2011 は午組とし、劉一曼 2011a も午組として本文中に引用しているものである。合集 22052 = 乙編 597 の拓本からは判断が難しいが、カラー写真である R26641 を確認すると兆序字の位置形式が B 式であり、「戊」が折秘であることが理解でき、また「𠂔」の右側が欠刻されるのは後述の合集 22196 と同様の現象である。このほか、本片における祭祀対象「祖戊」は、午組卜辞においては 9 片で祭祀例がある⁵⁵⁾ もの、兆序字の位置形式が同一である歴組にも 3 例存在する⁵⁶⁾。しかしながら歴組の例はいずれも本片と字体が異なるため、歴組ではありえない。以上から、本片は午組に帰属させるべきである。

18. 合集 22076

本片は蔣玉斌 2006b・莫伯峰 2011・劉一曼 2011a・楊軍会 2019 がいずれも午組とする。成思遠 2021 は論文内で情報の整合性が取れておらず、p.100 では未収であるのに対し、p.61 では「合集 22070 甲乙 + 合集 22076 + 乙補 217 + 乙補 890」とする。『拼五』所載の「甲骨新綴號碼表」に未載のため、成思遠 2021 による新綴の可能性はあるが、綴合図や綴合の根拠は不明であるため、従うことはできない。なお、合集 22076 = (乙編 1430 + 乙編 762) = (R28673 + R26860) であるが、R28673 の「申」と兆序字「六」、および R26860 の「于」はいずれも午組の特徴字であり、これを帰属させない理由はない。

19. 合集 22196

本片は R44536 = 丙編 609 (乙編 4741 + 乙編 4822 + 乙編 8188 + 乙編 8427 + 乙編 8597 + 無番号)⁵⁷⁾ と同一であり、帰属先については以下の諸説がある。

まず、魏慈徳 2001 は合集 22196・合集 22301・合集 22339 は称谓からみれば午組に帰属させるべきとし、蔣玉斌 2006b は「乙種子卜辞材料総表」未収ながらも、「乙種甲骨有的填墨 (合 22078 = 丙 614、合 22098 = 丙 613)、填褐 (合 22196 = 丙 609) 現象、也有未填顔色的 (如合 22074 = 丙 92)」⁵⁸⁾、「合 22196 “貞” 字倒刻作 。」⁵⁹⁾ とする。このほか、莫伯峰 2011 は不明とし、劉一曼 2011a は本文中に午組卜辞として引用するものの、楊軍会 2019・成思遠 2021 はともに未収である。

按ずるに、鼓腹「貞」などの特徴字から本片の字体はいずれも午組A群1類であると考えられ、兆序字の位置形式もB式であり、祭祀対象に兄己・父丁がみられることも午組の傾向と矛盾しない⁶⁰⁾。本片は午組に帰属させるべきである。

20. 合集 22301

本片は乙編 4677=R44638 であり、先行研究ではやや複雑な議論が展開されている。以下、簡潔に紹介する。まず李学勤 1958 は本片ほか数片を貞人「巫」による非王卜辞「巫卜辞」に分類していたが、のちに李学勤 1987 では乙編 4677 を自組に附属させるべきであると意見を変え、魏慈徳 2001 は巫卜辞の大半は自組小字類・賓組・午組・劣体類・円体類のいずれかに帰属させるべきと主張した。⁶¹⁾ さらに蔣玉斌 2006b は実際には「巫卜辞」は非王卜辞の可能性が高いが実数は十片以下の一群であると結論付け、その論証の過程で本片についても言及をおこなっている。⁶²⁾ 蔣説を要約すると、本片は界線によってA（上部）とB・C（中部・下部）が分割されており、それぞれの字体・特徴が明確に異なるが、Aは兆序字の位置形式がB式でありB・CがA式、また「其」「佳」「酉」の字体が午組と一致するため、この部分は午組に帰属するのではないか、ということになる。ただし、これも上掲の例に漏れず「乙種子卜辞材料総表」には未収録である。このほか、莫伯峰 2011 は帰属先を不明とし、楊軍会 2019・成思遠 2021 は未収である。袁倫強・李発 2019 は上部が巫卜辞・中部と下部は婦女卜辞⁶³⁾ であるとするが、注釈に示した通り、これを参考とはしない。

諸家の説は以上の通りであるが、結論から言えば本片は午組に帰属させるべきである。本片の字体は上部がA群であり、中部以下がB群である。中部以下の「戊」や偏旁「女」の字体は、形態そのものは午組A群と一致するものの、曲筆を多用し、墨書の風格を色濃く反映しており、B群に帰属することは疑いない。内容も妣乙・妣戊・妣辛・妣癸・母庚に対する祭祀の記述であり、いずれも午組卜辞に他の祭祀例が存在するため矛盾はない。

また、中部以下は兆序字の位置形式がA式であることから、上部と中部以下は、別々の人物によって契刻されたことが想定される。これはB類の特性を考える上で非常に重要な現象であろう。なぜなら、実際には本片の「」「」と合集 35261【出類】「」⁶⁴⁾、あるいは R44624 の「」と合集 19970【出類】「」、合集 22094 + 合集 22441 の「其」と合集 35264【出類】の「卑」の上部のように、本片に限らずB群の字体の特徴は午組のみならず出類とも共通するからである。

蔣玉斌 2006b、劉一曼 2011a、成思遠 2021 のB群に対する諸説は既に本文もしくは注釈で示した通りだが、これらは黄天樹 1998 の説をそれほど重視していないことが欠点であった。上述した特徴は、本片ひいてはB群の実態が、「出類の契刻者が午組の字体を模倣して製作した午組卜辞」である可能性を非常に強く示唆する。そして、そうであるがゆえに、本片の中部以下が兆序字の位置形式および字体が異質であるにもかかわらず、内容面は午組と一致していたのである、と考えることは少なくとも先行研究の諸説よりは合理的であろう。

21. 綴三 609 (ZR44547)

本片は前述の合集 22301 よりも複雑な議論が展開されており、殷綴 411（合集 22206 甲（乙編 973 + 乙編 804 + 乙編 1780 + 乙編 1855） + 合集 22206 乙（乙編 1479 + 乙編 1623）） + 合集 22187（乙編 1428） + R37014 という複雑な綴合片でもあるため正確な理解が難しい。そのため、先行研究の

整理に入る前に、その議論の理解を助けるために、まず午組における「五妣」関連卜辞と本片の卜辞を下表に提示する。

	著録号	組類	卜辞
1	合集 22100 ⁶⁵⁾	午組	・「戊申卜、禱生五妣于乙于父己。」
2	R44627 ⁶⁶⁾	午組	・「乙未卜、于妣壬禱生。」 ・「于妣壬禱生。」 ・「于妣乙。」 ・「于妣辛。」 ・「于妣己。」 ・「于妣癸。」
3	ZR44547	?	・ 甲戌貞、妣乙亳又〔侑〕歲。 ・ 甲戌貞、妣己亳又〔侑〕勺歲。 ・ 甲戌貞、妣辛亳又〔侑〕歲。 ・ 甲酉 ⁶⁷⁾ 貞、亳又〔侑〕勺歲妣壬。 ・ 甲戌貞、亳妣癸又〔侑〕歲。 ・ 甲□貞、亳歲母戊。 ・ …貞、亳歲母戊。 ・ 乙亥貞、用△妣乙、不。 ・ 丁丑卜、卯夢自祖庚至 <u>勺戊</u> 。 ⁶⁸⁾ ・ □祖□。

まず、陳夢家 1956 は乙編 973+乙編 1780 と乙編 1704 の記述から「五妣」のメンバーが妣乙・妣己・妣辛・妣壬・妣癸であると考え⁶⁹⁾、前述の通り肖楠 1979 は乙編 1428 を午組と自組の共版例であるとしていたが⁷⁰⁾、直接に本片について言及したものは、管見の限り魏慈徳 2001 が初であり、彼は合集 22206+合集 22187 は称谓から考えれば午組に改入するべきであり、午組の字体が自組小字類の影響を受けている証拠であるという説を提示した⁷¹⁾。蔣玉斌 2006b は魏慈徳 2001 説こそ引いていないもの以下示すように興味深い見解を提示している。すなわち、本片は字体が午組とは異なるものの、その祭祀対象は「五妣」が確実に同一人物であり、かつ「五妣」は午組卜辞の占ト主体の家族の重要な直系先妣である、というものである。⁷²⁾ が、やはり「乙種子卜辞材料総表」には未収である。彭浩喆 2020 は、合集 22206・合集 22187 の両部分を莫伯峰 2011 説の補証によって自組小字類に帰属させる。⁷³⁾

諸家の説は以上の通りであるが、以下示すように、本片は卜辞の内容が午組と一致しているが、字体などが午組と自組、なかんずく自組小字 B 類との中間的な特性を示すものであり、結論としては合集 22067 や前掲の合集 22437+乙編 975+乙編 1458+乙編 1827 と同様に「自組小字類の影響を受けた午組」に帰属しうる。

卜辞の内容としては、「丁丑卜、卯夢自祖庚至父戊。」に出現する人名・行為・対象が ZR28688 「庚申卜、東禦子祖庚皆至于父戊、抑。」【午組】、および合集 22065 「壬戌卜、子夢獻邑執父戊。」【午組】と一致し、また頻見する「又歲」=「出歲」=「侑歲」も、基本的には村南系の王卜辞と午組に特有⁷⁴⁾のものである。祭祀対象「妣乙・妣己・妣辛・妣壬・妣癸」=五妣であることは蔣玉斌 2006b が指摘する通りだが、「母戊」も合集 22076・村中南 357 のように午組の祭祀例が存在する。以上の内容は、自組卜辞ではまずありえない。

字体の特徴としては、以下の九点が先に示した結論の根拠となる。

- 一、「丁」が正円に近い形状であり、これは午組には皆無だが自組には常見の写法であること。
- 二、「戌」が縦画の終点が三叉ではないこと以外は合集 19920【自組小字B類】と同様の字体であること。
- 三、「貞」が方耳・平腹であり、これは午組A群2類・自組小字B類の特徴字であること。
- 四、「祖」が縦長の長方形で横画の位置が下に寄っている字体であり、合集 20045【自組肥筆類】などに同様の例が複数存在すること。
- 五、「庚」が平肩・縦画不出頭で下部延伸・横画二本であり、午組A群2類の特徴字であること。
- 六、「卜」が時計回りに九十度回転しており、合集 22063 中など⁷⁵⁾に類例があること。
- 七、「不」の筆画の末端が極めて尖鋭であること。
- 八、午組の「侑」は通常「出」だが、本版は全て「又」であり、自組小字類では併用すること。
- 九、兆序字の位置形式がB式であること。

以上である。このほか、本片には注釈で示した通り干支の誤りや文字の誤刻が看取される。一部の「貞」が不安定な刻跡⁷⁶⁾であることも考え合わせると、本片は午組の契刻者が自組の文字を模倣・学習するために刻んだ版であろうと考えられる。

最後に、本片に関連して合集 22145 の文字・卜辞についても言及しておきたい。合集 22145 の文字は、「𠄎」「𠄏」などが典型的な午組A群2類の字体であるが、「𠄐」は午組では他に例が存在しない字体であり、合集 20866+合集 20900+合集 21000【自組小字A類】⁷⁷⁾の「𠄑」と類似する。また、卜辞「夢禦毫于妣乙服鼎。」は文中に出現する人名などがいずれも本片のものと一致している。しかしながら、両片の「于」「夢」「妣」の字体は異なり、実綴も不可能である。以上の特徴から、合集 22145 は本片とは別々の亀甲であるものの、同時期に製作され、同様に自組の影響を受けていた可能性が高いと考える。「𠄐」以外の文字の特徴から、本論文では合集 22145 を暫定的に午組A群2類に帰属させる。

22. 村中南 412

整理者は「似午組卜辞」であるとするが、「禦」らしき文字をはじめとして、複数の文字の字体は午組の特徴字と一致し、また筆画の末端は尖鋭であるため、午組に帰属させるべきである。

23. 国博 88

本片は『国博』以外には著録されていない。本片上には午組の特徴字である鼓腹「貞」が確認され、整理者も午組に帰属させている。異論はない。

24. 陝西 48

本片は「陝西」以外には著録されていない。整理者は「此片中“戌”・“戌”二字、折秘、似“午組卜辞”字体」と述べる。本片の「戌」と「戌」はともに折秘であり、なおかつ横画が出頭している。午組A群1類に帰属させるべきである。

第4節：午組卜辞の再分類と再命名

前節では午組卜辞の基本的な再整理を完了したが、複数の片の整理過程で言及していた午組と自組の関係については改めて自説をまとめて提示する必要があるだろう。鑽鑿など甲骨の加工形態が類似していること、そして出土傾向が類似することは既知であるが、このほか、南北双方からまとまった数量の甲骨が出土するのは午組と自組のみであること、そして午組A群には界線が存在しないが、B群の一部⁷⁸⁾・D群の全片や自組卜辞には存在することからも、二組の関連を看取できる。

字体以外の特徴の共通性は以上の通りであり、そして先行研究で発見されていた午組の小群は、字体の特徴や契刻の習慣などを整理すると、それぞれA群2類と自組の各類の特性が確認できる。すなわち、B群は出類の、C群は自賓間類の、D群は自組肥筆類の、そしてE群（合集22067・綴三609・合集22437+乙編975+乙編1458+乙編1827）や合集22145は自組小字類と類似した特性を有する。既述の例もあるが、代表的なものをまとめると下表のようになる。

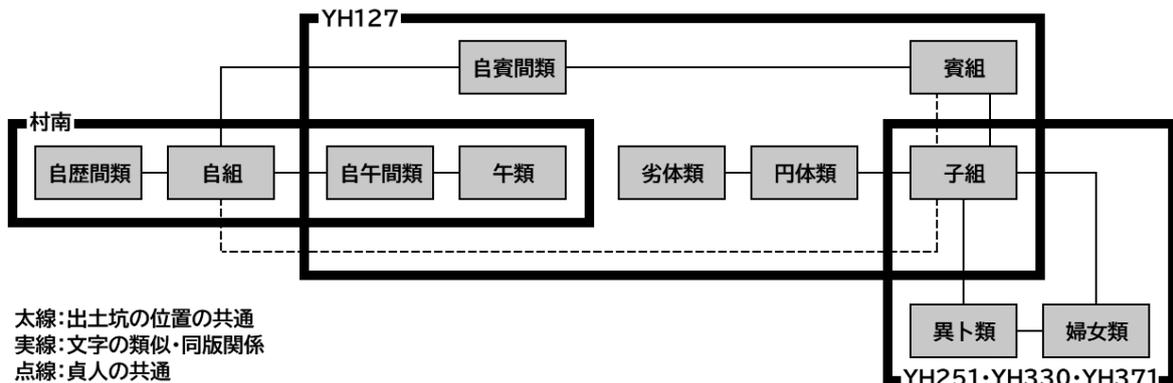
文字	自組	B群・C群・D群・E群
申	 合集19970【出類】	 R44624【B群】
庚	 合集35261【出類】	 合集22301【B群】
庚	 合集1022乙【自賓間類】	 合集22047【C群】
宰	 合集2943【自賓間類】	 合集22047【C群】
六	 合集19946【肥筆類】 ⁷⁹⁾	 合集22184【D群】
申	 合集19950【肥筆類】	 合集22184【D群】
丁	 合集19861【小字B類】	 綴三609【E群】
貞	 合集20614【小字B類】	 乙編975【E群】

また、午組A群の「貞」は、1類（早期）→1類（後期）→2類の変化に合わせて鼓腹（𠄎）→平腹・尖耳（𠄎）→平腹・方耳（𠄎）という経過を辿っているが、鼓腹「貞」は午組に特有であること、方耳「貞」は午組・自組・歴組に特有であること、自組小字B類の「貞」は方耳が大半であることの三点を考慮すれば、もともと一定の独自性のある技術と習慣を有していた午組A群1類の契刻者が、自組の製作者集団と交流した結果として産生したのがA群2類とC群・E群であること、そして刻写の習慣が異なるB群・D群は自組の契刻者が午組の技術を模倣して製作したものであることが推定される。

これらの小群は、内容は午組卜辞と概ね共通する⁸⁰⁾ものの、その字体などの特徴を重視し、「自午間類」というように改称した上で、対応する自組の各類の名称を冠した群名を与えることが適切である。また「午組」も厳密には貞人組ではなく、字体の特徴によって整理・集積された刻字甲骨のグループであるのだから、より正確には「午類」とするべきである。当然、こういった命名における「午」は貞人名などではなく、単に旧来の通称を承けた標識に過ぎないことは言うまでもない。具体的な命名は以下の通りである。

旧称	新称
午組A群1類(早期・後期) 午組A群2類	午類1群(早期・後期) 午類2群
午組B群	自午間類(自出群)
午組C群	自午間類(自賓群)
午組D群	自午間類(自肥群)
午組E群	自午間類(自小群)

さて、以上のように午類は自組との共通性を有するが、子組卜辞は同時期に製作されていた賓組・午類・婦女類・円体類・劣体類と同坑出土のほか、午類以外とは文字にも相互の影響が認められ、同版例も存在する⁸¹⁾。さらに、子組卜辞は祭祀対象が同時期の王卜辞と類似するほか⁸²⁾、所属する貞人「子」「余」「我」「歸」「徂」のうち、「歸」は賓組貞人「掃」と、「徂」は自組貞人「術」と同一人物である⁸³⁾。以上を踏まえて、武丁中期に存在した組類間の関係を簡単に整理すると下図のようになり、午類が子組と比べるとやや孤立しており、相対的に自組と密接な関係にあったことも理解できる。



ここからより想像を膨らませれば、王卜辞の字体が村北系・村南系の二つへ緩やかに分裂し始めた武丁中期に存在した非王卜辞も、その区分はそれほど厳密ではなかったもの、おおよそ村北・村南と対応した系統に分類していたのではないかとも考えられる。つまり、村北から出土する賓組・子組・婦女類・円体類・劣体類が当時の主流派に、村北・村南の双方から出土する自組・午類が非主流派に属する卜辞であった、ということになるだろう。

結 論

本論文の結論は以下の通りである。まず、旧来の「午組卜辞」は午類と自午間類の二つに大別される。午類は1群(早期・後期)と2群の二つに、自午間類は自出群・自賓群・自肥群・自小群の四つに分割される。さらに、午類2群と自午間類の字体は自組との類似性が認められ、それらの発生の原因は1群(後期)が自組の影響を受けたことであると推定できる。自午間類のうち、自賓

群・自小群は午組の契刻者が自組の技術を模倣して製作した群であり、自虫群と自肥群は刻写の習慣が異なり、午類ではなく対応する自組の各小類の契刻者による群であると考えられる。

午類・自午間類の甲骨の綴合後の合計点数は240であり、午類・自午間類の甲骨は、材質は判明しているものに限ると亀甲が約9割を占める。出土坑の位置は村北がやや多いが、村南にも一定の数量がある⁸⁴⁾。甲骨の加工方式と共に、これも自組と共通する特徴である。

以上のことから、午類は自組の契刻者集団の強い影響下で製作されていたと推定できる。また、子組卜辞が同時期に存在した他組類との関係が密接であったことを踏まえれば、村北から出土する賓組・子組・婦女類・円体類・劣体類が当時の主流派に、村北・村南の双方から出土する自組・午組が非主流派に属する卜辞であった、という構造も想定しうるが、断定の材料を欠く。武丁中期の刻字甲骨の製作体制の正確な解明は、今後の課題としたい。

参考文献

初出年順に配列し、同年のものは五十音順に配列した。「再録」・「新版」などが存在するものについては、いずれも最新のものを参照した。

(中国語)

- 董作賓 1932:「甲骨文断代研究例」(『中央研究院歴史語言研究所集刊外編・慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』。再録:『董作賓學術論著』(世界書局 2008年))
- 陳夢家 1956:『殷墟卜辞綜述』(科学出版社。新版:中華書局(1988年))
- 李学勤 1958:「帝乙時代的非王卜辞」(『考古学報』1958年・第1期)
- 嚴一萍 1959:「积四祖丁」(『大陸雜誌』第18卷・8期)
- 劉淵臨 1969:「殷虚“骨簡”及其有關問題」(『中央研究院歴史語言研究所集刊』第39本・上冊)
- 于省吾 1979:『甲骨文字积林』(中華書局。新版:中華書局(2009年))
- 肖楠 1979:「略論“午組卜辞”」(『考古』1979年・第6期)
- 姚孝遂 1979:「商代的俘虜」(『古文字研究』第1輯)
- 林雲 1979:「從武丁時代的幾種“子卜辞”試論商代家族形態」(『古文字研究』第1輯)
- 裘錫圭 1981:「論“歷組卜辞”的時代」(『古文字研究』第6輯。再録:『裘錫圭學術文集』第一卷(復旦大学出版社 2015年))
- 陳建敏 1985:「論午組卜辞的稱謂系統及其時代」(殷都學刊編輯部『全國商史學術討論會論文集』)
- 彭裕商 1986:「非王卜辞研究」(『古文字研究』第13輯)
- 嚴一萍 1989:『殷墟第十三次發掘所得卜甲綴合集』(芸文印書館)
- 黃天樹 1991:『殷墟王卜辞的分類与断代』(天津出版社。新版:科学出版社(2007年))
- 方述鑫 1992:「論“非王卜辞”」(『古文字研究』第18輯)
- 蔡哲茂 1993:「說𠄎」(『第四屆中國文字學全國學術研討會論文集』(大安出版社))
- 裘錫圭 1996:「殷墟甲骨文“彗”字補說」(『華學』第2輯(中山大學出版社)再録:『裘錫圭學術文集』)
- 李学勤・彭裕商 1996:『殷墟甲骨分期研究』(上海古籍出版社)
- 黃天樹 1998:「午組卜辞研究」(『甲骨文發見一百周年學術檢討會論文集』(文史哲出版社)再録:『黃天樹古文字論集』(学苑出版社 2006年))
- 蔡哲茂 1998:「甲骨文合集綴合補遺(續十七)」(『大陸雜誌』97卷・第6期)
- 黃天樹 2000:「子組卜辞研究」(『中國文字』第26期)再録:『黃天樹古文字論集』)
- 魏慈德 2001:「殷墟 YH127 坑甲骨卜辞研究」(國立政治大學博士學位論文)
- 張世超 2002:『殷墟甲骨文字迹研究—自組卜辞篇』(東北師範大學)
- 裘錫圭 2005:「“花東子卜辞”和“子組卜辞”中指称武丁的“丁”可能應該讀為“帝”」(『黃盛璋先生八秩華誕紀年文集』(中国教育文化出版社)再録:『裘錫圭學術文集』第一卷)
- 楊郁彦 2005:『甲骨文合集分組分類總表』(芸文印書館)
- 蔣玉斌 2006a:「乙種子卜辞(午組卜辞)新綴十四例」(『古籍整理研究學刊』2006年・第2期)
- 蔣玉斌 2006b:「殷墟子卜辞的整理与研究」(吉林大學博士學位論文)
- 蔡哲茂 2007:「殷墟文字丙編新綴第四則」(先秦史研究室網站(<http://www.xianqin.org/blog/archives/1571.html>))

- 謝湘筠 2007：「殷墟甲骨新綴二十組」（『東華人文學報』第 11 期）
- 蔣玉斌 2010a：「蔣玉斌甲骨綴合總表（203 組）」
（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/1883.html>））
- 蔣玉斌 2010b：「蔣玉斌甲骨綴合總表（270 組）」
（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/2152.html>））
- 蔣玉斌 2010c：「《甲骨文合集》綴合拾遺（第九十一～九十三組）」
（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/2217.html>））
- 崎川隆 2011：『賓組甲骨文分類研究』（上海人民出版社）
- 蔣玉斌 2011：「蔣玉斌甲骨綴合總表（300 組）」
（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/2305.html>））
- 莫伯峰 2011：「殷墟甲骨卜辭字體分類研究」（首都師範大學博士學位論文）
- 劉一曼 2011a：「重論午組卜辭」（『甲骨文與殷商史』新 2 輯（上海古籍出版社））
- 劉一曼 2011b：「殷墟近出甲骨綴合三例」（『殷都學刊』2011 年・第 3 期）
- 蔣玉斌 2012a：「甲骨新綴 35 組（更新第 30 組）」
（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/2576.html>））
- 蔣玉斌 2012b：「新綴甲骨第 9-10 組」（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/2798.html>））
- 趙鵬 2012：「甲骨綴合一則」（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/2797.html>））
- 杜峰 2012：「甲骨拼合第 1 則」（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/2782.html>））
- 朱岐祥 2013：「殷墟小屯村中村南甲骨積文補正」（『中國文字』第 39 期）
- 蔣玉斌 2013：「甲骨新綴十二組 [蔣玉斌]」（先秦史研究室網站）
（<https://www.xianqin.org/blog/archives/3292.html>））
- 蕭晟潔 2013：「歷組卜辭字體分析」（華東師範大學博士學位論文）
- 喻遂生 2014：「甲骨文“至”語法研究」（『出土文獻綜合研究集刊』第 1 輯（巴蜀書社））
- 劉風華 2014：『殷墟村南系列甲骨卜辭整理與研究』（上海古籍出版社）
- 蔣玉斌 2015：「子卜辭綴合 11 組」（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/4961.html>））
- 莫伯峰 2015：「甲骨卜辭不同字體共版情況的整理與研究」（『甲骨文與殷商史』新 5 輯（上海古籍出版社））
- 方美霞 2015：「《村中南》午組卜辭的整理與研究」（國立東華大學碩士學位論文）
- 賈晨 2016：「中國國家圖書館藏甲骨文字（2201-4300、6801-7300）校訂」（吉林大學碩士學位論文）
- 江左容 2016：「《甲骨文合集》綴合研究」（國立政治大學碩士學位論文）
- 周洋洋 2016：「中國國家圖書館藏甲骨文字（1-2200、7301-8300）校訂」（吉林大學碩士學位論文）
- 張志強 2016：「《殷墟小屯村中村南所見新材料》與“兩系說”的運用」（『古漢語研究』2016 年・第 1 期）
- 韋心滢 2017：「小屯南地新出土午組卜辭相關問題研究」（『甲骨文與殷商史』新 7 輯（上海古籍出版社））
- 黃天樹 2017：「關於午組卜辭真人的考察」（初稿：1994 年。修定・收錄：『第六屆中國文字發展論壇論文集』（中州古籍出版社 2017 年）。再錄：『黃天樹甲骨學論集』（中華書局 2020 年））
- 李愛輝 2017：「甲骨材質弁識」（『甲骨文與殷商史』新 7 輯）
- 李霜潔 2017：『殷墟小屯村中村南甲骨卜辭積文』（中華書局）
- 劉源 2017：「談午組卜辭中的“工乙羊”、“工乙豕土”」
（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/9463.html>））
- 孫垂冰・馬季凡 2018：「中國社會科學院歷史研究所藏善齋甲骨拓本集簡介」（『天津學志』第 11 輯）
- 趙偉 2018：「殷墟甲骨語詞匯積」（河南大學博士學位論文）
- 馬智忠 2018：「殷墟無名類卜辭的整理與研究」（吉林大學博士學位論文）
- 袁倫強・李發 2019：「甲骨文積讀札記（三則）」（『甲骨文與殷商史』新 9 輯（上海古籍出版社））
- 王建軍 2019：『賓組卜辭研究・分類卷』（科學出版社）
- 社科院考古研 2019：中國社會科學院考古研究所安陽工作隊「安陽殷墟大司空村東南地 2015-2016 年發掘報告」（『考古學報』2019 年・第 4 期）
- 韓文博 2019a：「侯南卜辭性質新論——兼談何組・黃組間的關係」（『中國文字研究』29）
- 韓文博 2019b：「試析侯南卜辭的年代問題」（『甲骨文與殷商史』新 9 輯）
- 康炬黃 2019：「自組甲骨文字體分類定量研究」（華東師範大學碩士學位論文）
- 左勇 2019：「午組卜辭“入乙”小箋」（『中國史研究』2019 年・第 4 期）
- 石振利 2019：「無名類卜辭字形整理與研究」（華東師範大學碩士學位論文）
- 楊軍會 2019：『殷墟子卜辭的整理及文字研究』（廣西師範大學出版社）
- 紀帥 2020：「師類甲骨資料整理與分類研究」（吉林大學碩士學位論文）

- 彭浩喆 2020：「自組卜辞字体分類研究」（華東師範大学碩士學位論文）
 袁倫強 2021：「甲骨文考釈札記二則（釈“狗”、釈“盧”“盧豕”）」（『甲骨文与殷商史』新 11 輯（上海古籍出版社））
 成思遠 2021：「午組卜辞の整理与研究」（首都師範大学碩士學位論文）
 趙鵬 2021a：「《村中南 294+村中南 486》の再発表」（先秦史研究室網站（<http://www.xianqin.org/blog/archives/15499.html>））
 趙鵬 2021b：「截鋸甲骨探微」（『甲骨文与殷商史』新 11 輯）
 展翔 2021：「国家図書館蔵甲骨（已公布部分）著録整理」（『文献』2021 年・第 1 期）
 胡輝平 2022：「対国図蔵甲骨綴合成果の校理」（『文献』2022 年・第 1 期）

（日本語）

- 前川捷三 1976：「午組卜辞についての考察」（『中哲文学会報』一号）
 崎川隆 2008：「批評と紹介楊郁彦著甲骨文合集分組分類総表」（『東洋学報』90 卷・第 2 号）
 落合淳思 2016：『甲骨文字辞典』（朋友書店）

史料

本論文では 2022 年 6 月までに刊行された刻字甲骨の著録書などを可能な限り蒐集して調査をおこなったが、紙幅の都合により、ここでは本文・附録で引いたものしか挙げない。三種以上の版本が存在するものは、初版と実際に参照したものの二つを併記した。また、錢歆青『従日本人手中奪回的商代甲骨齊魯国宝伝奇』（済南出版社 2015 年）李運富『河南蔵甲骨集成・開封博物館巻』（河南美術出版社 2021 年）は未見であり、博物館・研究所の所蔵品は現地調査をおこなっていない。ウェブサイトの最終閲覧日は 2022 年 6 月 30 日。

- 鉄：劉鶚『鉄雲蔵龜』（1903 年（石印本）再録：『甲骨文研究資料匯編』（北京図書館出版社 2008 年））
 前：羅振玉『殷虚書契』（1911 年（『国学叢刊』第 3 期・3 卷）再録：『殷虚書契五種』（中華書局 2015 年））
 后■：羅振玉『殷虚書契后編』（1916 年（影印本）再録：『殷虚書契五種』 ※「■」は「上」または「下」。上巻または下巻。))
 簠■：王襄『簠室殷契徵文』（1925 年（天津博物院）再録：『甲骨文研究資料匯編』 ※「■」は章題。）
 拾：葉玉森『鉄雲蔵龜拾遺』（1925 年（影印本）再録：『甲骨文研究資料匯編』）
 続：羅振玉『殷虚書契続編』（1933 年（影印本）再録：『殷虚書契五種』）
 佚：商承祚『殷契佚存』（1933 年（金陵大学中国文化研究所）再録：『甲骨文研究資料匯編』）
 庫：方法斂・白瑞華『庫方二氏所蔵甲骨卜辞』（1935 年（商務印書館）再録：『甲骨文研究資料匯編』）
 粹：郭沫若『殷契粹編』（1937 年（文求堂）再録：『甲骨文研究資料匯編』）
 録：孫海波『甲骨文録』（1938 年（河南通志館）再版：1959 年（芸文印書館・重印本））
 天：唐蘭『天壤閣甲骨文存』（1939 年（輔仁大学）再録：2017 年『天壤閣甲骨文存並考釈』（上海古籍出版社））
 珠：全祖同『殷契遺珠』（1939 年（中法出版委員会）再版：1975 年（芸文印書館・重印本））
 金：方法斂・白瑞華『金璋所蔵甲骨卜辞』（1940 年（影印本））
 六■：胡厚宣『甲骨六録』（1945 年（成都齊魯大学国学研究所）再録：『甲骨文研究資料匯編』 ※「■」は収蔵者。）
 甲編：董作賓『小屯殷虚文字甲編』（1948 年（商務印書館））
 乙編：董作賓『小屯殷虚文字乙編』（上輯：1948 年（商務印書館）中輯：1949 年（商務印書館）下輯：1953 年（中央研究院歴史語言研究所）再版：1995 年）
 掇一：郭若愚『殷契拾掇』（1951 年（上海出版公司））
 南■：胡厚宣『戦後南北所見甲骨録』（1951 年（来薰閣） ※「■」は収蔵者。）
 掇二：郭若愚『殷契拾掇二編』（1953 年（上海出版公司））
 京津：胡厚宣『戦後京津新獲甲骨集』（1954 年（群聯出版社）再録：『甲骨文研究資料匯編』）
 殷綴：郭若愚・曾毅公・李学勤『殷虚文字綴合』（1955 年（科学出版社））
 存■：胡厚宣『甲骨続存』（1955 年（群聯出版社） ※「■」は「上」または「下」。上巻または下巻。）
 外：董作賓『殷虚文字外編』（1956 年（芸文印書館））
 丙編：張秉樞『殷虚文字丙編』（1957 年～1973 年（中央研究院歴史語言研究所））
 海■：饒宗頤『海外甲骨録遺』（1958 年（『東方文化』4 卷 1・3 期） ※「■」は収蔵者。）
 京人：貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』（1959 年（京都大学人文科学研究所））
 安明：許進雄『明義士収蔵甲骨文集』（1973 年（王立オンタリオ博物館））
 合集：郭沫若：主編『甲骨文合集』（1978 年～1982 年（中華書局））
 懷：許進雄『懷特氏等収蔵甲骨文集』（1980 年（王立オンタリオ博物館））

- 屯南：中国社会科学院考古研究所『小屯南地甲骨』（1980年（中華書局））
 東大：松丸道雄『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字』（1984年（東京大学出版会））
 英国：李学勤・齐文心・艾蘭：編中国社会科学院歴史研究所・倫敦大学亜非学院：編輯『英国所蔵甲骨集』（1985年～1993年（中華書局））
 花南：中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1991年安陽花園莊東地・南地発掘簡報」（『考古』1993年6期）
 存補：胡宏宣・王宏・胡振宇『甲骨続存補編』（1996年（天津古籍出版社））
 乙補：鍾柏生：主編『小屯殷虛文字乙編補遺』（1996年（中央研究院歴史語言研究所））
 山東：劉敬亭『山東省博物館珍藏甲骨墨拓集』（1998年（齊魯書社））
 綴集：蔡哲茂『甲骨綴合集』（1999年（中央研究院歴史語言研究所））
 合補：彭邦炯・謝濟・馬季凡・中国社会科学院：編『甲骨文合集補編』（2000年（語文出版社））
 来源表：胡厚宣：主編『甲骨文合集材料来源表』（2000年（中国社会科学出版社））
 花東：中国社会科学院考古研究所『殷墟花園莊東地甲骨』（2003年（雲南人民出版社）2017年（修訂本））
 拾掇：郭若愚『殷契拾掇』（2006年（上海古籍出版社）※『掇一』・『掇二』と未刊行の『掇三』の合本）
 国博：中国国家博物館『中国国家博物館館蔵文物研究叢書甲骨卷』（2007年（上海古籍出版社））
 北珍：李鐘淑・葛英会『北京大学珍藏甲骨文字』（2009年（上海古籍出版社））
 上博：濮茅左『上海博物館蔵甲骨文字』（2010年（上海辭書出版社））
 拼集：黃天樹『甲骨拼合集』（2011年（学苑出版社））
 醉古：林宏明『醉古集——甲骨的綴合与研究』（2012年（万卷楼））
 社歷：宋鎮豪・趙鵬・中国社会科学院歴史研究所『中国社会科学院歴史研究所蔵甲骨集』（2012年（上海古籍出版社））
 村中南：中国社会科学院考古研究所『殷墟小屯村中村南甲骨』（2012年（雲南人民出版社））
 拼統：黃天樹『甲骨拼合統集』（2012年（学苑出版社））
 拼三：黃天樹『甲骨拼合三集』（2014年（学苑出版社））
 旅博：宋鎮豪・郭富純・中国社会科学院甲骨学殷商史研究中心・旅順博物館『旅順博物館所蔵甲骨』（2015年（上海古籍出版社））
 卡：周忠兵『卡内基博物館所蔵甲骨研究』（2016年（上海人民出版社））
 香港：李宗焜：主編『典雅勁健香港中文大学蔵甲骨集』（2017年（中文大学出版社））
 拼四：黃天樹『甲骨拼合四集』（2017年（学苑出版社））
 陝西：郭妍利「陝西師範大学博物館蔵甲骨文积読与研究」（『考古与文物』2018年・第3期）
 復旦：呂静・葛亮『復旦大学蔵甲骨集』（2020年（上海古籍出版社））
 拼五：黃天樹『甲骨拼合五集』（2020年（学苑出版社））
 搜聚：拓本搜聚策事組『甲骨文合集第13冊拓本搜聚』（2020年（文物出版社））
 吉蔵：吳振武『吉林大学蔵甲骨集』（2022年（上海古籍出版社））
 綴三：蔡哲茂『甲骨綴合三集』（2022年（中央研究院歴史語言研究所））
- 善：『善齋甲骨拓本』⁸⁵⁾
 歷拓：中国社会科学院歴史研究所蔵拓本
 歷蔵：中国社会科学院歴史研究所蔵甲骨
 考沐：中国社会科学院考古研究所原沐園
 考精：中国社会科学院考古研究所原精拓殷契文
 吉大：吉林大学所蔵甲骨・館蔵号
 CUL：ケンブリッジ大学図書館
 RSM：スコットランド国立博物館
 VAM：ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館
- R：中央研究院歴史語言研究所編號（「史語所数位典藏資料庫整合系統」）
 ZR：中央研究院歴史語言研究所編號（「史語所数位典藏資料庫整合系統」（合編資料）
 (<https://ihparchive.ihp.sinica.edu.tw/ihpkmc/ihpkm>)
 北図：中国国家図書館蔵甲骨文字（「中国国家図書館・中国国家数字図書館」甲骨世界
 (<http://read.nlc.cn/specialResource/jiaguIndex>) に一部収録。⁸⁶⁾）

注

- 1) このほか、「侯南類」という小群も非王卜辞であると考えられていたが、韓文博 2019a・韓文博 2019b は、侯南類卜辞の字形が何組三類と黄組一類のものとは非常に類似していることを根拠に、それが両者の過渡的な特質を備えた武乙・文武丁代の王卜辞であるという見解を提出している。筆者はこの主張が概ね正しいと考えているので、これに従う。
- 2) 蔣玉斌 2006b (pp.144-158) によれば、「后岡出土的卜骨」(合集 22536)、「貞字三足形的卜辞」(合集 21285、合集 21703)、「大司空村出土的“辛貞在衣”和“文貞”卜骨」(SH314 ③:3、無編號)、「花園莊南地“子貞”卜骨」(M99 上③:2)、「“子亡若”卜骨」(合集 31676+劉淵臨 1969 凶一一:2)などが存在する。このうち、劉淵臨 1969 凶一一:2 について蔣玉斌 2006b (pp.149-150) は「這是我們綴合的一版卜骨(拓影見下頁、摹本見附録三第 80 組)。下段為合 31676。上段為劉淵臨先生劉淵臨《殷虛“骨簡”及其有關問題》凶一一:2 發表、似乎未見正式著錄、劉先生說:“此片字骨或為李棧齋先生藏、或為香港大學藏、筆者手拓。”とするが、現在のところ「海棧」と『香港』には著録されていない。
また、2015 年~2016 年に大司空村東南地 J25 で出土した 7 片の刻字卜甲について、社科院考古研 2019 (p.563) は「据劉一曼教授分析、這七片刻辞与花園莊東地 H3 刻辞一樣、均為非王卜辞、字体特徵略晚于花園莊東地 H3。」とする。しかしながら、趙鵬 2021b (p.517) が「五版可能由兩或三刻手刻写。」と指摘するように、J25 卜辞を単体の組類であると考えすることは困難である。さらに言えば、J25 卜辞の字体はいずれも花東子類との共通点が存在せず、内容から非王卜辞と断定することもできない。これについては、また機会を改めて論じる予定である。
- 3) pp.21-41 「各家分類認定情況統計」(対象:黄天樹 1991、李学勤・彭裕商 1996、楊郁彦 2005、莫伯峰 2011) 所載の無岐見片、および pp.157-166 「岐見片類属判断」の結果を基準とした。いずれも対象範囲は『合集』・『合補』に限定されている。また、紀帥 2020 は材料整理に未達成の部分が多く、原則として参考としていないが、村中南 341・村中南 342 が出類・自質問類の同版であるという説(pp.54-55)には従った。
- 4) 賓組の全面的な整理を試みた研究には崎川隆 2011 があり、これは『合集』に資料の範囲を限定している。王建軍 2019 はやや広く『合集』『合補』『英国』『北珍』の四書を対象としており、崎川隆 2011 とは一部に分類の相違があるものの、本論文では暫定的にこちらに依拠した。
- 5) 帰属先の確定が難しい片、および劉風華 2014 が未分類の片は蕭晟潔 2013 「附録一:歷組卜辞各家具體認定表」を参考とした。
- 6) 帰属先の確定が難しい片、および馬智忠 2018 が未分類あるいは「存疑」とする片については、石振利 2019 「附録一:無名類卜辞認定情況總表」を参考とした。
- 7) 崎川隆 2011 (pp.1-17)、莫伯峰 2011 (pp.3-8) など。
- 8) 本論文における「字体」という詞語は文字の形態のことを指し、その差異については原則的に劉志基 2016 の定義に従う。
 - ・ 独体字の差異
 - ① 筆画の数量の差異 (ㄨ・ㄣ)
 - ② 筆画の形態の差異 (ㄥ・ㄙ)
 - ③ 筆画の交接の差異 (ㄨ・ㄨ)
 - ④ 文字の方向の差異 (ㄨ・ㄨ)
 - ・ 合体字の差異
 - ① 構成部品の数量の差異 (ㄨ・ㄨ)
 - ② 構成部品の位置の差異 (ㄨ・ㄨ)
 - ③ 構成部品の形態の差異 (ㄨ・ㄨ)
- 9) 例外は合補 6774・村中南 350。
- 10) 兆序字が契刻される位置の形式は蔣玉斌 2006b (pp.162-166) によると以下の三つに分類され、分類の基準の一つとして利用することが可能である。
 - ・ A 式: 兆幹の横側に兆序字を刻む形式。位置は兆枝の方向と同一。自組の大部分・賓組・出組・何組・自質問類・歴二類の大部分・歴草類・無名組・婦女類・子組が該当。
 - ・ B 式: 兆序字を卜兆の真上に刻む形式。歴一類の大部分・午組・円体類・劣体類・黄組が該当。
 - ・ C 式: A 式に近いが、兆枝と兆序字の位置が近接している形式。花東子類が該当。
- 11) 黄天樹 1998 は合集 20505 【肥筆類】、合集 19957 正 【出類】、合集 20391 【小字類】、合集 20060 【自質問類】の例を挙げ、各類と午組の関係が密接であるとする。
- 12) 蔣玉斌 2006b (p.74)
- 13) この二条の卜辞は彭裕商・李学勤 1996 と黄天樹 1998 がともに引用しており、午組の時代を推定する根拠となっている。

- 14) 肖楠は劉一曼・郭振泉・曹定雲の共同ペンネーム。また、『屯南』の資料を一部使用しているため、順序を入れ替えている。
- 15) 各群の特徴は以下の通り。
- ・B群：字体がA群と一致し書風が自組肥筆類に類似しているが直接の関係はなく、筆書の風格を脱し切れていない契刻者の実習卜辞。
 - ・C群：字体の一部が自賓問類の特性を備える午組卜辞。
 - ・D群：字体が午組と異なるが、語彙や兆序字の位置は午組と一致する卜辞。
 - ・E群：字体が午組と異なるが、「S形」や兆序字の位置は午組と一致する卜辞である。合集22067の一例のみであるため、「不過、由于其只有一片我們就不別划小類了。」(p.80)とされるが、同ページで「E群的“巳”則作方首、兩臂一上一下形。」としている。成思遠2021は単に「合集22067」とする。後述のように、本論文では本片および後述の数片を併せてE群とする。
- 16) 2007年の鄭州大学博士学位論文(同名)を改稿したものであるため、順序を入れ替えている。『村中南』は未反映。
- 17) 2012年の華東師範大学博士学位論文「殷墟卜辞整理及其文字研究」を改題・改稿したものであるため、順序を入れ替えている。『村中南』は未反映。
- 18) 『村中南』は2010年の刊行が予定されていた。これは『村中南』の資料を多数引用しているため、順序を入れ替えている。
- 19) 主要な問題点は以下の通り。
- ・p.124：村中南457(丁未～戊申)と合集22059(庚戌～辛酉)について、「此條卜辞是同年十月至十三月間」とするが、これは韋心澄が合集22059の「十月」と兆序字の「三」を連続して「十三月」としてしまったがために起きたミスである。これは午組卜辞の兆序字の位置が原則的にB式であることを知っていれば、容易に回避できる。
 - ・p.130：合集22178の帰属先を誤って午組としている。これに限らず、彼女が引用する「午組卜辞」の定義は不明である。
 - ・p.133：「在犠牲前喜加天干与形容詞、如乙𠄎・乙𠄎・辛牛・乙妻・丁𠄎(前掲《合》22197+22390+《乙》8873+8942)壬牛・盧豕・盧羊。《尚書・文侯之命》「盧弓一、盧矢百」偽孔伝云「盧、黒也」「盧豕」・「盧羊」即「黒猪」「黒羊」之意。」としているが、祭祀犠牲名の語頭に十干を付すというのは、いずれも祭祀対象の省称か地名、あるいは誤読である。「盧」については、わざわざ『尚書』文侯之命を引くまでもなく既に巫称喜2001が「黒」の意である可能性に言及しているが、そもそも「盧豕」の「盧」は黒を意味しない。劉書芬2010や袁倫強2021が引用するように、合集22073「乙酉卜禦新于父戊白豕」「乙酉卜禦新于妣辛白盧豕」が存在するためである。論文中では合集22073がp.126で引用されており、「白𠄎豕」と表記されているが、本片の「𠄎」が「盧」の異体であることは明白である。「盧豕」の意味は、袁倫強2021(p.257)「“盧”字的本義或即指一種體形較大的猪。“盧”“𠄎”皆從𠄎声、讀音相近、甲骨文“盧”是某類豕、“𠄎”本也指某類豕、則“盧”所指之豕可能就是“𠄎”、即一種體形較大的猪。」と指摘するように、「大きなブタ」である可能性が高い。
 - ・p.133：「所用犠牲前亦喜加程度副詞「至」如「至牢」「至盧豕」。「至」有極・最之意、為形容程度中的最高級。」とある。しかしながら、程度副詞「至」の用例は春秋以降のものが中心である。また諭遂生2014は殷墟甲骨文中における「至」の用例を分析した結果、祭祀犠牲を目的語とする「至」は犠牲を捧げるという意味の「致」と読むべきであるとし、趙偉2018(p.768)も同様の説である。合集21543【子組】「辛亥…其至三白豕、父甲𠄎」はその好例。
 - ・p.136：「關己」は不正確。村中南297にみえる称謂は、原版の字形に従えば正確には「𠄎己(𠄎己)」であり、整理者(劉一曼)は午組卜辞の新見称謂であるとする。また、「𠄎(𠄎)」は他に花東181の例がある。当然ながら、「關」と「𠄎」は別字なのでこれは明確に誤りである。また、朱岐祥2013は「𠄎」は両手で「丨」を持つ形であり、「父」の異体字の可能性があるため、「父己」とした上で整理者の説については存疑とする。本片の「父」については、朱岐祥2013の指摘通り「父(𠄎)」の異体であるか、もしくは誤って手一つ多く刻んでしまっただけである可能性が高い。「父己」は午組内部では父丁・父戊には数が及ばないものの、合集22074、合集22075、合集22100、合集22184、村中南447の合計5片の祭祀例があり、午組卜辞中に存在することは不自然ではない。
- 20) 韓文博「午組卜辞的分类与断代新探」(『殷都学刊』2022年・第2期)は入手が遅れたため、未見。
- 21) 表は成思遠2021(pp.9-19)の記述を整理して作成したものであるため、午組卜辞に存在する全ての字形を網羅しているわけではない。一例として、「貞」は代表的な「𠄎」「𠄎」の他に、「𠄎」(村中南405・村中南472・国博88・吉蔵10)、「𠄎」(合集22086)、「𠄎」(合集22145)、「𠄎」(合集22091甲乙+合集22124+合集22212+合集22309+合集22410+合集22418+合補5638+乙編8557+乙補3399+乙補3400+乙補6106)、「𠄎」

- (村中南 483)、「𠄎」(合補 6774)、「𠄎」(合補 6865) の7種が存在する。
- 22) 成思遠 2021 は1類の字体には早期・後期の区別があるとするが、その定義を明確に示さない。参考とされている張世超 2002 では、ある字跡内の早晩関係は文字の簡化によって定義される。張世超は具体例として自組肥筆類の「王」が填実式「𠄎」→虚廓式「𠄎」のように変化する現象を挙げた上で、「一旦開始刻写簡体的𠄎以後、刻写者便很難再恢復刻写那種麻煩的填实式𠄎了。」(p.153) とするほか、虫類の具体例として「午」の「𠄎」→「𠄎」や、「廬」の「𠄎」→「𠄎」などを挙げる。
- 23) いずれもB群。
- 24) 魏慈徳 2001 (p.68)
- 25) 成思遠 2021 はB群について『村中南』有幾版可作補充：366+、483、496」(p.15) とするが、このうち366と496については既に劉一曼 2011a が指摘するところである。このほか、劉一曼 2011a はB群の特徴を「除了行款不大整齐、筆画转折自然、線條也較円潤流暢、似較有經驗的刻手的作品。我們推測、午組卜辞的某些刻手、在大量折筆字的卜辞中、挿入円筆大字、是為了使整版卜辞字体不過於刻板・單調、呈現出剛柔互濟・生動活潑的風格、這是一種藝術化的處理。」(p.195) と述べているが、これを見落としたままB群を初習者の作品と推測していることも小さくないミスであろう。ただし、劉一曼 2011a の説には根拠らしい根拠が示されておらず、B群の文字に対する彼女の個人的な感想の域を脱していないものであるため、従うことはできない。
- 26) 成思遠 2021 は合集 1393 に午組の特徴字が存在しないことを根拠に、この片の帰属について存疑としているが、既に楊軍会 2019 が賓組一類に帰属させるべきであると指摘しているほか、王建軍 2019 は賓組二類であるとする。また、楊軍会 2019 も午組卜辞の釈文の校訂をおこなっているが、これを無視して独自に附録一「午組卜辞釈文」を製作していることも不可解である。
- 27) 成思遠 2021 (p.86) 「關於「入乙」身份、本文從李霜潔按語、「入乙」非「下乙」。「入乙」為「内乙」、亦即「小乙」。(筆者注：「李霜潔」=李霜潔 2017) とするが、実際には左勇 2019 が指摘するとおり、入乙・小乙・下乙(殷王の祖乙)はそれぞれ異なる人物である。仮に左勇 2019 の見解が誤っていると考えているならば、その根拠を提示する必要があるだろう。
- 28) 綴合者そのものが明示されていない場合もある。一例として、p.99 では合集 21967+合集 22310 の「綴合者」欄は空欄となっているが、実際には蔣玉斌 2011・第205組の綴合である。
- 29) 典型例は拼三 310・屯南 2647+屯南 2775。
- 30) 例外的に、村中南 492 は「𠄎」と「𠄎」が同版上に存在するが、「于」についても1類後期「于」と2類「𠄎」が併存しており、これも本文中で示した例と同じく、両類の混淆例であると考えべきである。
- 31) 成思遠 2021 (p.1) が特徴字の欠乏を根拠に存疑とする片については、村中南 412 を除いて午組ではないと判断した。また、「此版甲骨材料暫未找到、暫將片号擱置于此。」(p.86) とする吉大 7-156=吉蔵 10 には鼓腹「貞」が契刻されており、整理者は乙種子卜辞とする。午組に帰属すると考えてよい。
- 32) 『旅博』には整理者が午組とみなすものが数片存在するが、以下の通り旅博 3 以外は午組ではない。
- ・旅博 2：=合集 22162。莫伯峰 2011：不明。午組の特徴字が存在しない。王卜辞に特有の先王の直系合祀がみられる。
 - ・旅博 3：=合集 22059。蔣玉斌 2006b：午組。
 - ・旅博 4：=合集 21945。午組の特徴字が存在せず、筆画の末端も尖鋭ではない。蔣玉斌 2006b：円体類。
 - ・旅博 5：「戊辰」の二字が確認できるが、いずれも午組の特徴字ではなく、筆画の末端も尖鋭ではない。
- 33) 蔣玉斌 2006b (pp.180-189)
- 34) のちに、劉源 2017 は合集 22467 の綴合を正解としていたが、林宏明の「關於此版綴合、可參考謝湘筠：〈殷墟甲骨新綴二十組〉、《東華人文學報》第十一期(2007年7月)。該文第16組有說明。」(2017年12月5日) というコメントを受け、自説を撤回している。
- 35) 顕微鏡写真は「1916 甲」とし、釈文は「1916 骨」とする。原著の記述だけでは亀甲か獣骨か不明だが、村中南 298などを参考にすると、本編の材質が獣骨であることが理解できる。
- 36) 成思遠 2021 は本片「𠄎」と合集 22073「𠄎」・合集 22075「𠄎」を「下庚」とするが、上部の二本の横画の長さは等しく、下部とも一体化しているため従うことはできない。楊軍会 2019 (p.144) は合集 12617「𠄎」【賓一類】と屯南 2384「𠄎」【歴二類】の例を挙げ、「庚」と釈字するべきであると主張するが、最上部の横画の存在について説明を怠っている。按ずるに、例数が少ないため断言は難しいものの、祭祀対象の称谓に飾筆として横画を一本添加するのが午類卜辞特有の習慣である可能性がある。合集 22044 の石甲「𠄎」はその具体例であり、上掲例はいずれも祭祀対象「庚」と考えた方がよい。
- 37) 嚴一萍 1959 (p.4)
- 38) このうち、趙鵬 2021b (p.520) は合集 40910 を自小類とするが、根拠は不明。
- 39) 拓本は「𠄎」であり、楊軍会 2019 (p.161) は「又」と読む。

- 40) 合集 20852 について、彭浩喆 2020 は「楊郁彦判断為肥筆類、莫伯峰判断為小字類。該拓片上出現的區別性字体為申：字体 7、属小字類、且未见不属小字類的關鍵字体、故本文判断 H20852 属小字類。」とする。しかしながら、彭浩喆 2020 が字体 7 とする合集 20056・合集 20360・合集 20398・合集 20866・合集 22373 の「申」がいずれも S 形であるのに対し、本片は Z 形であり、かつ横倒しの字体となっている。また、本片の「𠄎(用)」は自組に類例が存在しない字体である。本片が自組に帰属するか否か、そして仮に自組である場合も小字類であるかどうかについては再考する必要がある。
- 41) 『村中南』整理者である劉一曼は歴組を第四期に位置付けているため、「一期卜辞」に歴組は含まれない。
- 42) 屯南 1100 「庚戌貞其禱禾于示壬。」「庚戌貞其禱禾于上甲。」など多数。
- 43) 合集 22044 「𠄎」、合集 22098 「𠄎」「𠄎」はいずれも中心部が曲線であり、英国 1921 のように三点ではない。
- 44) 合集 22044・合集 22048・合集 22065・合集 22068・合集 22074・合集 22078・合集 22092・合集 22098・合集 22123・ZR28176・屯南 2241・屯南 2698・村中南 295・村中南 311・英国 1919・合集 22063 中+乙補 7125+R37385+R44633・合集 22066+乙編 2112・村中南 352+村中南 459。
- 45) 村中南 453 に 1 例、村中南 485 に 3 例、合集 15108+合集 22045 に 3 例。いずれも字体・兆序字の位置形式ともに典型的な午組。「𠄎」の角部分が左側に偏った異体。
- 46) 合集 22078、合集 22063 中+乙補 7125+R37385+R44633。いずれも字体・兆序字の位置形式ともに典型的な午組であり、同版上には「𠄎」も 2 例が確認できるため、単に「𠄎」の中心の縦画の延伸を怠ってしまった例であると考えられる。
- 47) 合集 22073・合集 22074・合集 22077・合集 22078・村中南 308・村中南 485・上博 21691.140・合集 18439+合集 22106+合集 22111+乙編 1851。
- 48) 合集 22046・合集 22054・合集 22057・合集 22058・合集 22065・合集 22071・合集 22075・合集 22085・合集 22108・合集 22112・合集 22115・合集 22116・屯南 2509・村中南 335・村中南 478・村中南 507・合集 15108+合集 22045・合集 22063 中+乙補 7125+R37385+R44633・合集 22091 甲乙+合集 22124+合集 22212+合集 22309+合集 22410+合集 22418+合補 5638+乙編 8557+乙補 3399+乙補 3400+乙補 6106。
- 49) 合集 22075。字体・兆序字の位置形式ともに典型的な午組。
- 50) 合集 22110。同版「歲」は午組の特徴字であり、「𠄎」も中心の縦画の延伸が不足し、下部が残欠していること以外は「𠄎」と同一の字体である。
- 51) 合集 22062。字体・兆序字の位置形式ともに典型的な午組。
- 52) 合集 22301。本文で後述する通り、合集 22301 は午組 B 群に帰属する。
- 53) 綴合対象は不明。
- 54) 王建軍 2019 における「黄拼」は『拼集』『拼統』『拼三』『拼四』であるが、対応する著録番号はない。各書に所載の、2004 年以降の「甲骨新綴号碼表」の記述を襲っただけであると推察される。
- 55) 合集 22047、合集 22051、合集 22052、合集 22053、合集 22073、合集 22074、合集 22078、村中南 453、R44627。
- 56) 合集 32222・合集 32524・屯南 175 の三片。
- 57) 『来源表』は合集 22196=丙編 609 (乙編 4741+乙編 4822+乙編 8188+乙編 8427+乙編 8597+0) とするが、誤り。また、「史語所數位典蔵資料庫整合系統」も乙編 8594 (R43458) の合集番号を 22196 とするが、同様に誤り。
- 58) 蔣玉斌 2006b (P.72)
- 59) 蔣玉斌 2006b (p.75)
- 60) 兄己は 5 例 (合集 19775、合集 19776、合集 22075、合集 22276、村中南 457)、父丁は 10 例 (合集 22046、合集 22047、合集 22048、合集 22056、合集 22066+乙編 2112、合集 22072、合集 22073、合集 22099、村中南 453、R44624)、午組卜辞における祭祀例が存在する。
- 61) 魏慈徳 2001 (pp.137-138)
- 62) 蔣玉斌 2006b (pp.155-156)
- 63) 中部・下部には婦女類の特徴字が存在しない。また、陳夢家 1956・李学勤 1987 に従い、「妣戊」の「媯」などを私名とする説を採っているが、それでは姚孝遂 1979 が指摘するとおり、妣戊一人に三名があることになってしまう。このほか、落合淳思 2016 はそれらの文字を「祭祀名」としているが、根拠を欠く。この問題については、于省吾 1979 のように、女性祖先の祭祀にあたって用いる人身犠牲の種類を表していると考えの方が合理的である。方述鑫 1992 も于説に左袒し補証をおこない、趙偉 2018 も「用為人姓名」「用作人姓名」などとする。この説に従う。袁倫強・李発 2019 の主張の中で従うべきは、「媯」を「媯」ではなく「媯」と解釈した点のみである。
- 64) 虫類の「庚」は上部が四条に分裂しており、かつ下部の形状が丸みを帯びている。本文で挙げた合集 35261 の例の他に合集 20792 (カ 4) 「𠄎」「𠄎」村中南 341 「𠄎」村中南 342 「𠄎」が具体例となる。合集 20792 の帰属先の判断は莫伯峰 2011 を、特徴字の判断は彭浩喆 2020 を基準とした。
- 65) 乙編 1704 (R28996)。

- 66) 合集 22050 (乙編 4522 + 乙編 4520 + 乙編 4678) + 合集 22103 (乙編 6390)。
 67) 「甲酉」は存在しない干支。蔡哲茂 2006 が指摘するとおり、誤刻。
 68) 拓本では不鮮明だが、写真では「𠄎 (勺)」であることが確認できる。同版内に他に二字が存在することから推測すると、字形の似る「𠄎 (父)」の誤刻であると考えるのが最も自然。
 69) 陳夢家 1956 (p.105)。李学勤 1958 (p.66) も同説。
 70) 肖楠 1979 (p.511)
 71) 魏慈德 2001 (p.68)
 72) 蔣玉斌 2006b (pp.94-95)
 73) 彭浩喆 2020 (p.164)
 74) 花東 236 「𠄎伐兄丁告妣庚又歲」が唯一の例外。村北系の王卜辞やこれ以外の非王卜辞には用例がない。
 75) 黄天樹 1998・楊軍会 2019。黄天樹 1998 は合集 21523 など自組肥筆類にも数例があることから、二者の関連の密接さを指摘する。
 76) 「甲戌貞、妣乙毫侑歲。」の「貞」は右耳の右縦画が下部と別々に刻まれていることなど。
 77) 蔣玉斌 2013・第 1 組。
 78) 村中南 366 + 村中南 459・合集 22301
 79) 合文「六月」の一部。
 80) 例外は D 群 = 自午間類 (自肥群) であり、これに限っては文字・内容ともに午類と自組の中間的な小群であり、かつ午組よりは自組肥筆類に似たグループであると考えなければならない。根拠は以下の三つ。第一に、「祖辛」「祖丁」の祭祀例は他群では皆無であるが自組なら常見である一方で、「天」の祭祀は午類に特有であること。第二に、「十一月」などの合文は、午類と B 群 = 自午間類 (自中群) の場合は蔣玉斌 2006b の言うところの式 b 「D」であるが、本群は式 c 「𠄎」であること。第三に、材質も牛骨を専用しており、自組肥筆類の材質選択の傾向と類似しているが、午類の傾向とは反していること。
 81) 子組 A 類は異卜類の影響を受けた字体であるほか、蔣玉斌 2006b は同版例の整理を通じて、賓組と子組 A 類、子組 A 類と異卜類の字体の共通性を指摘し (p.106)、また子組 A 類と円体類・劣体類の関係も密接であるとする (p.110)。蔣玉斌 2006b と莫伯峰 2015 とによって子組と他組類との同版状況を整理すると、下表のようになる。

著録号	内容
合集 7117・合集 12319・合集 12815	賓組三類。「自」字は子組 A 類
合集 9419 - 合集 9431	賓組の背甲記事刻辞。「自」字が子組 A 類
合集 10111・合集 14903	子組 A 類と賓組三類の同版
合集 21643	子組と自賓間類の同版
合集 21784	子組の干支表と賓組一類の貞旬辞が同版
合集 21872 正反	正面が劣体類、反面が円体類
合集 21980	劣体類と円体類の同版
合補 6829	子組・婦女類の同版
英国 1891	子組・円体類の同版

このほか、闕河仰「甲骨試綴第九則【闕河仰】」(先秦史研究室網站 (<http://www.xianqin.org/blog/archives/16697.html>) 2022 年 5 月 18 日) は合集 21924 (R28687) 【劣体類】と合集 21920 (R29020) 【円体類】を綴合するが、「史語所數位典蔵資料庫整合系統」所載のカラー写真を確認する限り、二片の綴合は不可能であり、誤綴と考える。

- 82) 黄天樹 2000 (p.84) が「過去、陳夢家・李学勤・林滙等先生对此都作過詳細的整理。根拠他們所整理的子組祭祀対象来看、所祭先人絶大多数都在商王祀譜以內、和商王武丁所祭相同。」と指摘するように、子組の祭祀対象はそれ以外の非王卜辞と異なり、製作時期を同じくする賓組・自組に類似する。
 83) 蔡哲茂 1993 (pp.89-90) は賓組貞人「𠄎」と子組貞人「𠄎」、賓組の祭祀対象「𠄎壬」と子組の祭祀対象「𠄎壬」が同一人物である可能性を指摘し、裘錫圭 1996 (pp.35-36) や落合淳思 2016 (pp.477-478) も同様の見解を示す。また、自組貞人「術」と子組貞人「𠄎」については、裘錫圭 2005 (p.517) は「子組卜辞屢見“𠄎”字、有的是貞人名或婦名(中略)各家都以為“𠄎”与“自組卜辞”用作貞人名的“術”是同一字繁簡兩体。」とし、

趙偉 2018 (p.705) も「自組卜辞習从行。子組卜辞或从水」「或用作貞人名、見於自組和子組卜辞。」と述べる。異なる組類の間で同一人物の称谓に対して異なる表記が用いられる実例としては、既に裘錫圭 1981 (p.109)・落合淳思 2016 (p.334) が指摘する通り、賓組「伯誡」と歴組・花東子類「伯或」などが存在する。以上から、本論文では子組貞人「𠄎」「𠄎」をそれぞれ賓組貞人「𠄎」・自組貞人「𠄎」と同一人物であると考え。今回は紙幅の都合で割愛したが、注 81)、82)、83) の内容については、また機会を改めて詳しく論じたい。

84) 附録「午類卜辞材料来源表」

85) 劉体智(善齋)所蔵甲骨の拓本集。線装本。未公刊。参考：孫亜氷・馬季凡 2018

86) 『合集』・『合補』・『京津』・『善』と北図の番号の対応、および綴合の正誤については賈晨 2016・周洋洋 2016・展翔 2021・胡輝平 2022 を参考とした。趙愛学「国家図書館の善齋旧蔵甲骨及其著録」(『文津学志』第 10 輯(2017 年)) は未見。

附録：午類卜辞材料来源表

- 『来源表』・蔣玉斌 2006b・成思遠 2021 を、新出の資料や綴合に関する学術論文などによって補訂して作成した。
- 「小群」は自午問類の略称を記載し、午類の片は空欄とした。
- 「材質」は原則として各著録書・ウェブサイト所載の情報に依拠し、一部は李愛輝 2017 を参考として情報の修正・追加を行った。

資料番号	主要著録	小群	材質	坑位	重見・所蔵・綴合
1	合集 751		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3849 (R33280)
2	合集 4956		?	不明	佚 618
3	合集 15451		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3100 (R32313)
4	合集 18123		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3569 (R32726)
5	合集 18236		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 7471 (R42457)
6	合集 19775		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1006 (R28165)
7	合集 19776		?	不明	続 1.44.1 (一部)・簠帝 197・簠拓 300
8	合集 20853		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 0934 (R28086)
9	合集 21082		亀甲	不明	拾 8.1・存補 1.52.3
10	合集 21164		亀甲	不明	南坊 3.46・存補 5.20.5=存補 5.54.2
11	合集 21238		?	不明	珠 704
12	合集 21509		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3717 (R33059)
13	合集 21608		?	不明	海椽 22
14	合集 21699		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 2580 (R29718)
15	合集 21772		?	不明	京津 3155・存補 6.72.1・北図 2702
16	合集 21958		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1520 (R28792)
17	合集 22044		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 5327 (R44655)
18	合集 22046		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 5399 (R44662)
19	合集 22047	自賓	亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 4521 (R44628)
20	合集 22048		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 4925 (R44647)
21	合集 22051		?	不明	存補 6.419.2
22	合集 22052		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 597 (R26641)

資料番号	主要著録	小群	材質	坑位	重見・所蔵・綴合
23	合集 22053		?	不明	京津 3119・善 24454・掇三 218
24	合集 22054		?	不明	前 4.16.4、通 201
25	合集 22056		亀甲	不明	存上 1458・考沐 51・北冏 342・掇三 593
26	合集 22057		?	不明	存下 759 (模本)・歴拓 11469・掇三 39
27	合集 22058		?	不明	山東 1771
28	合集 22059		?	不明	旅博 3
29	合集 22060		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1783 (R29064)
30	合集 22062		獸骨	1936/⑬ / 村北 / YH127	R43688=乙編 8670 / 乙編 8671
31	合集 22064		獸骨	不明	善 3277
32	合集 22065		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 5394 (R44660)
33	合集 22067	自小	亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R44537=丙編 610 (乙編 4508+乙編 4545)
34	合集 22068		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 7261 (R44828)
35	合集 22069		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 4064 (R44617)
36	合集 22071		?	不明	鉄 204.2
37	合集 22072		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 766 (R26887)
38	合集 22073		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 4603 (R44636)
39	合集 22074		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R44297=丙編 92 (乙編 5455+乙編 5328)
40	合集 22075		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R44622=乙編 6298+乙編 4333+乙編 4857
41	合集 22076		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	(乙編 1430+乙編 762)・(R28673+R26860)
42	合集 22077		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 5384 (R44659)
43	合集 22078 (※ 2)		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	丙編 614 (乙編 4745+乙編 4763+乙編 4811+乙編 5113+無番号)=R44541
44	合集 22080		亀甲	不明	存上 1456・善 14325
45	合集 22083 甲乙		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 7900~乙編 1336 (R42749~ R28516)
46	合集 22084		獸骨	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 8663 (R43682)
47	合集 22085		亀甲	不明	京津 2124・善 2414・北冏 7816
48	合集 22089		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 858 (R28027)
49	合集 22090		?	不明	京津 2757・善 24038
50	合集 22092	自賓	亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3478 (R44610)
51	合集 22096		?	不明	京人 701
52	合集 22097		獸骨	不明	拾 5.14
53	合集 22098		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R44540=丙編 613 (乙編 5519+乙編 3521+乙編 5825+乙編 5483+乙編 7543 +無番号)
54	合集 22099		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 5405 (R24986)
55	合集 22100		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1704 (R28996)
56	合集 22101 右		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 2854 (R32026)
57	合集 22107		?	不明	歴拓 7880・山東 1785

資料番号	主要著録	小群	材質	坑位	重見・所蔵・綴合
58	合集 22108		亀甲	1931/⑤ / 村中 / F 区	甲編 3366 (R35918)
59	合集 22109		亀甲	不明	佚 640・復旦 1・六束 1 (一部)
60	合集 22110		亀甲	不明	安明 S160
61	合集 22112		獣骨	1931/⑤ / 村中 / F 区	甲編 3609 (R40218)
62	合集 22114		亀甲	不明	安明 S268
63	合集 22115		亀甲	不明	后下 40.1・善 20402
64	合集 22116		?	不明	前 8.8.4 (一部)・山東 1052
65	合集 22117		亀甲	不明	掇二 338
66	合集 22118		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1536 (R28816)
67	合集 22119 甲乙		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 5521~乙編 5523 (R38958~ R38959)
68	合集 22120		?	不明	拾 10.10
69	合集 22122		亀甲	不明	簠帝 211・簠拓 759
70	合集 22123		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3558 (R32706)・合補 6878
71	合集 22145		亀甲	不明	后上 6.4
72	合集 22177		?	不明	京津 3118・善 12844
73	合集 22184	自肥	獣骨	不明	掇三 841=前 1.27.1+前 2.23.4 (存下 756・山東 0920) + 社歴 1322 (歴拓 605)
74	合集 22185		?	不明	歴拓 7747
75	合集 22196		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R44536=丙編 609 (乙編 4741+乙編 4822 + 乙編 8188+乙編 8427+乙編 8597+無番号)
76	合集 22199		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3483 (R32570)
77	合集 22276		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 4544 (R44632)
78	合集 22295		?	不明	京津 2942・北囡 3122・存補 6.155.4
79	合集 22298		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1749 (R29027)
80	合集 22301	自出	亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 4677 (R44638)
81	合集 22305		亀甲	1931/⑤ / 村中 / F 区	甲編 3370 (R35922)
82	合集 22339		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 4746 (R38380)
83	合集 22412		?	不明	合集 4845・鉄 113.3・歴拓 8664・佚 819・存上 1284
84	合集 22413		亀甲	不明	続 5.6.2, 簠拓 1025
85	合集 22423		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 7402 (R42427)
86	合集 22438		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 6674 (R42044)
87	合集 22439 ※ 7		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1062 (R28142)・ZR28128 (一部)
88	合集 22454		?	不明	天 50 (一部)・歴拓 10071
89	合集 22478		亀甲	不明	録 572
90	合集 31147		?	不明	佚 31・考精 50
91	合集 32985		?	不明	鉄 104.1

資料番号	主要著録	小群	材質	坑位	重見・所蔵・綴合
92	合補 2172		?	不明	合集 22476 (后下 8.9) + 合集 22477 (考沐 139・北囿 111・撥三 780)
93	合補 2999		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1761 (R29036)
94	合補 6774		龜甲	不明	懷 S1528
95	合補 6865		龜甲	不明	合集 22424 (外 250・六清 1) + 合集 22105 (歷拓 4187) = 拼集 15 (黃天樹)
96	合補 6886		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1558 (R28839)
97	合補 6934		?	不明	合集 22468 (合集 35233・存上 1922・善 449・北囿 5852) + 合集 22488 (善 19746・北囿 25146)
98	合補 8544		獸骨	不明	懷 B1664
99	甲編 3617		獸骨	1931/⑤ / 村中 / F区	R40227
100	甲編 3788		龜甲	1934/⑨ / 村北 / D区	R40572
101	乙編 845		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R26998
102	乙編 1330		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R28512
103	乙編 1460		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R28733
104	乙編 1466		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R28711
105	乙編 1535		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R28815
106	乙編 1699		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R28992
107	乙編 1769		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R29041・合補 9631
108	乙編 1774		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R29048
109	乙編 3574		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R32730
110	乙編 3709		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R33047
111	乙編 3847		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R33276
112	乙編 5015		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R38602
113	乙編 8478		龜甲	1936/⑬ / 村北 / B122	R43318
114	乙編 9038 ※ 3		龜甲	1937/⑮ / 村北 / YH448	R41128・合集 22467 (一部)
115	乙補 401		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R26849
116	乙補 597		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R28014
117	乙補 602		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R28021
118	乙補 606		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R28026
119	乙補 1531		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R29099
120	乙補 3130		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R32774
121	乙補 3339		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R33002
122	R29095		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	合集 22149 (乙編 1814) + 乙編 1816
123	R44624	自出	龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	合集 22093 (乙編 4505 + 乙編 4719 + 乙編 8587) + 乙編 4944 = 蔣玉斌 2006a : 第 1 組
124	R44627		龜甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	合集 22050 (乙編 4522 + 乙編 4520 + 乙編 4678) + 合集 22103 (乙編 6390)

資料番号	主要著録	小群	材質	坑位	重見・所蔵・綴合
125	R44646		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	合集 22049 (乙編 4860+乙編 5162+乙編 5596+乙編 5178) + 合集 22081 (乙編 5156) = 醉古 110
126	ZR28176		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R28176 {合集 22055 (乙編 1015+乙編 1434+乙編 1538+乙編 1603+乙編 1764) + 乙補 1534} + 乙編 1557 (R28838) = 蔣玉斌 2006a : 第 9 組
127	ZR28688		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	合集 22079 甲 (乙編 1444・R28688) + R28128 {合集 22101 左 (乙編 983+乙編 982) + 合集 22129 (乙編 1625)} ~ 合集 22079 乙 (乙編 1464・R28710) = 蔣玉斌 2006a : 第 7 組
128	ZR28801		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	合集 22127 (乙編 1527・R28801) + 合集 22495 (乙編 1962・R29233) = 蔣玉斌 2006a : 第 6 組
129	ZR41126 ※ 3		亀甲	1937/⑮ / 村北 / C170	乙編 9036+乙編 9037 (R41126+R41127) 合集 22467 (一部)
130	ZR44547 ※ 4	自小	亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	殷綴 411 {合集 22206 甲 (乙編 973+804+1780+1855) + 合集 22206 乙 (乙編 1479+1623)} + 合集 22187 (乙編 1428) + R37014 R44547 (一部)
131	屯南 573		亀甲	1973/● / 村南 / H16	なし
132	屯南 2238		亀甲	1973/● / 村南 / H50	なし
133	屯南 2240		亀甲	1973/● / 村南 / H50	なし
134	屯南 2241		亀甲	1973/● / 村南 / H50	なし
135	屯南 2244		亀甲	1973/● / 村南 / H50	なし
136	屯南 2248		亀甲	1973/● / 村南 / H50	なし
137	屯南 2509		亀甲	1973/● / 村南 / H61	なし
138	屯南 2530		亀甲	1973/● / 村南 / H72	なし
139	屯南 2537		亀甲	1973/● / 村南 / H75	なし
140	屯南 2573		亀甲	1973/● / 村南 / H84	なし
141	屯南 2622		亀甲	1973/● / 村南 / H85	なし
142	屯南 2631		亀甲	1973/● / 村南 / H85	なし
143	屯南 2671		亀甲	1973/● / 村南 / H95	なし
144	屯南 2672		亀甲	1973/● / 村南 / H95	なし
145	屯南 2673		亀甲	1973/● / 村南 / H95	なし
146	屯南 2698		亀甲	1973/● / 村南 / H102	なし
147	屯南 2767		亀甲	1973/● / 村南 / H107	なし
148	屯南 2770		亀甲	1973/● / 村南 / H107	なし
149	屯南 2771		亀甲	1973/● / 村南 / H107	なし
150	屯南 3606		亀甲	1973/● / 村南 / M16	なし
151	屯南 4177		亀甲	1973/● / 村南 / T31 ③	なし
152	屯南 4314		亀甲	1973/● / 村南 / T4 ②	なし

資料番号	主要著録	小群	材質	坑位	重見・所蔵・綴合
153	村中南 295		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H4	なし
154	村中南 297		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H4	なし
155	村中南 308		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H4	なし
156	村中南 311		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H6 上	なし
157	村中南 320		獣骨	2002/ ● / 村南 /02H6 上	なし
158	村中南 333		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H6 上	なし
159	村中南 335		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H6 上	なし
160	村中南 336		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H6 上	なし
161	村中南 338		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H6 上	なし
162	村中南 350		獣骨	2002/ ● / 村南 /02H9	なし
163	村中南 357		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H9	なし
164	村中南 365		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H9	なし
165	村中南 379		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H9	なし
166	村中南 385		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H9	なし
167	村中南 404/村中南 405		獣骨	2002/ ● / 村南 /02H23	なし
168	村中南 412		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H54	なし
169	村中南 414		獣骨	2002/ ● / 村南 /02H55	なし
170	村中南 447		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
171	村中南 453		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
172	村中南 457		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
173	村中南 462		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
174	村中南 464		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
175	村中南 470/村中南 471		獣骨	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
176	村中南 472		獣骨	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
177	村中南 474		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
178	村中南 475		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
179	村中南 478		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
180	村中南 481		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
181	村中南 482		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
182	村中南 483	自出	亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
183	村中南 485		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
184	村中南 492		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
185	村中南 493		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
186	村中南 496	自出	亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
187	村中南 497		亀甲	2002/ ● / 村南 /02H57	なし
188	村中南 507		獣骨	2002/ ● / 村南 /02TA4 (3)	なし

資料番号	主要著録	小群	材質	坑位	重見・所蔵・綴合
189	懐 S833		亀甲	不明	なし
190	懐 S836		亀甲	不明	なし
191	東大 S1301		亀甲	不明	なし
192	東大 B1313		獣骨	不明	なし
193	京人 S 3205		亀甲	不明	なし
194	英国 1916	自肥	獣骨	不明	CUL547
195	英国 1917		亀甲	不明	庫 376・RSM376
196	英国 1918		亀甲	不明	庫 647・RSM647・合集 39508
197	英国 1919		亀甲	不明	庫 441・RSM441
198	英国 1922		亀甲	不明	RSM498
199	存補 2.81.2	自肥	獣骨	不明	なし
200	存補 6.203.1		亀甲	不明	なし
201	安明 S977		亀甲	不明	なし
202	安明 S984		亀甲	不明	なし
203	安明 S993		亀甲	不明	なし
204	京津 3158		?	不明	北図 3328
205	上博 2426.469		亀甲	不明	なし
206	上博 17645.562		?	不明	なし
207	上博 17645.866		亀甲	不明	なし
208	上博 48730.25		?	不明	なし
209	上博 21691.64		?	不明	なし
210	上博 21691.140		?	不明	なし
211	上博 49003.66		亀甲	不明	なし
212	花南M 99 上 3 : 1		獣骨	1991/● / 花南 /M99	なし
213	綴集 310	自肥	獣骨	不明	合集 22329 (山東 443)+合集 22453 (山東 812・前 8.9.2)=蔡哲茂 1998・第 16 組
214	綴三 609 ※ 4	自小	亀甲	1936/⑬ / 村北 /YH127	[殷綴 411 {合集 22206 甲 (乙編 973+804+1780+1855)+合集 22206 乙 (乙編 1479+1623)}+合集 22187 (乙編 1428+R37014)]=ZR44547=蔡哲茂 2006:第 7 組 R44547 (一部)
215	国博 88		亀甲	不明	なし
216	陝西 48		亀甲	不明	原号: SDB0051-3
217	吉蔵 10		亀甲	不明	吉大 7-156
218	拼三 599 (趙鵬 2021a)		亀甲	2002/● / 村南 /02H4	村中南 294
				2002/● / 村南 /02H57	村中南 486
219	拼三 810 (杜峰 2012)		亀甲	2002/● / 村南 /02H6 上	村中南 327
				2002/● / 村南 /02H9	村中南 361

資料番号	主要著録	小群	材質	坑位	重見・所蔵・綴合
一	合集 10724+		亀甲	不明	前 6.48.2
	英国 1920			不明	金 725・CUL560
二	合集 15108+		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 5810 (R39231)
	合集 22045			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 5321 (R44654)
三	合集 15277+		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3928 (R33386)
	合集 21874			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 2062 (R33386)
四	合集 18439+		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1615 (R28906)
	合集 22106+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1476 (R28720)
	合集 22111+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1609 (R28892)
	乙編 1851 ※ 2			1936/⑬ / 村北 / YH127	R29163
五	合集 18668+		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3850 (R33281)
	合集 22104+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 8113+ 乙編 4581=R38291
	合集 22121+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 7760 (R29480 (一部))
	合集 22125+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3501 (R32607)
	合集 22126+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3930 (R33388)
	合集 22128+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 7039 (R42268)
	合補 4454+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3839 (R33265)
	乙補 3579 ※ 5			1936/⑬ / 村北 / YH127	R33279
六	合集 19136+		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1089 (R28265)
	乙編 1785			1936/⑬ / 村北 / YH127	R29067
七	合集 21073+	自出	亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 5296 (R44650)
	乙編 5573 ※ 8			1936/⑬ / 村北 / YH127	R39017
八	合集 21967+		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1510 (R28779)
	合集 22310			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1445 (R28689)
九	合集 22061+		亀甲	不明	京津 3129・善 20254・北図 25654・撮三 401
	合集 22431			不明	京津 2963・善 1034・北図 6437
十	合集 22063 中+		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 8407 (R43192)
	乙補 7125+			1936/⑬ / 村北 / YH127	R43446
	R37385+			1936/⑬ / 村北 / YH127	なし
	R44633			1936/⑬ / 村北 / YH127	合集 22063 左右 (乙編 7512+乙編 8413) + 合集 22088 (乙編 4549) + 合集 22113 (乙編 8441/乙補 6971+乙編 8435) + 合集 22186 (乙編 8406)+乙編 8384+乙編 8443+乙編 8454+乙編 8455
十一	合集 22066+		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	R44569= 乙編 6687+ 乙編 7379+ 乙編 2061+乙編 2254
	乙編 2112			1936/⑬ / 村北 / YH127	R29350

資料番号	主要著録	小群	材質	坑位	重見・所蔵・綴合
十二	合集 22070 甲+		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 5410 (R38870)
	乙補 217+			1936/⑬ / 村北 / YH127	R26662
	乙補 890~			1936/⑬ / 村北 / YH127	R28321
	合集 22070 乙			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1173 (R28334)
十三	合集 22086+		獸骨	不明	前 7.39.2 (一部)・京津 3149 (一部)・掇三 378 (一部)。善 14250+ 善 19986、北図 19650+ 北図 25386
	合集 22087+			不明	粹 416 甲乙・善 199 正反・北図 5602
	合補 6884			不明	歴蔵 19682
十四	合集 22091 甲乙+		亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3259+乙編 3065+乙編 3803 (R32290 の一部)~乙編 7318 (R42384)
	合集 22124+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 7359 (R42408)
	合集 22212+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 7086 (R42289)
	合集 22309+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1185 (R28349)
	合集 22410+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 3843 (R29738 (一部))
	合集 22418+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 7280 (R42375)
	合補 5638+			1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 2625 (R29738 (一部))
	乙編 8557+			1936/⑬ / 村北 / YH127	R43419
	乙補 3399+			1936/⑬ / 村北 / YH127	R33828
	乙補 3400+			1936/⑬ / 村北 / YH127	R33084
	乙補 6106 ※ 6			1936/⑬ / 村北 / YH127	R42277
十五	合集 22094+	自出	亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 6690 (R44669)
	合集 22441			1936/⑬ / 村北 / YH127	R44565=乙編 1956+乙編 2130
十六	合集 22437+	自小	亀甲	1936/⑬ / 村北 / YH127	乙編 1470・ZR28128 (一部)
	乙編 975+			1936/⑬ / 村北 / YH127	R28128 (一部)・ZR28128 (一部)
	乙編 1458+			1936/⑬ / 村北 / YH127	R28699・ZR28128 (一部)
	乙編 1827 ※ 7			1936/⑬ / 村北 / YH127	R29113・ZR28128 (一部)
十七	屯南 2118+		亀甲	1973/● / 村南 / H74	なし
	村中南 468			2002/● / 村南 / 02H57	なし
十八	屯南 2647+		亀甲	1973/● / 村南 / H86	なし
	屯南 2775			1973/● / 村南 / H114	なし
十九	村中南 337+		亀甲	2002/● / 村南 / 02H6 上	なし
	村中南 389			2002/● / 村南 / 02H9	なし
二十	村中南 352+		亀甲	2002/● / 村南 / 02H9	なし
	村中南 364			2002/● / 村南 / 02H9	なし
二十一	村中南 366+	自出	亀甲	2002/● / 村南 / 02H9	なし
	村中南 459			2002/● / 村南 / 02H57	なし

- 一 蒋玉斌 2006b：第 37 組
- 二 蒋玉斌 2006a：第 5 組
- 三 ※ 1
- 四 ※ 2
- 五 蒋玉斌 2011・第 14 組（綴合図なし）※ 5
- 六 蒋玉斌 2006b：第 38 組
- 七 蒋玉斌 2006a：第 11 組
- 八 蒋玉斌 2011・第 205 組（綴合図なし）
- 九 蒋玉斌 2006a：第 13 組
- 十 蒋玉斌 2015：第 8 組= R44633（醉古 104）+合集 22063 中+乙補 7125 + R37385
- 十一 蒋玉斌 2006a：第 2 組
- 十二 蒋玉斌 2006a：第 10 組
- 十三 蒋玉斌 2006a：第 14 組
- 十四 蒋玉斌 2006a：第 3 組
- 十五 蒋玉斌 2006a：第 4 組
- 十六 ※ 7
- 十七 劉一曼 2011：第 3 組
- 十八 蒋玉斌 2006a：第 12 組
- 十九 劉一曼 2011：第 1 組
- 二十 蒋玉斌 2012b：第 9 組
- 二十一 劉一曼 2011：第 2 組

- ※ 1 参考：蒋玉斌 2006b/蒋玉斌 2010a/蒋玉斌 2011。合集 15277（乙編 3928）+合集 21874（乙編 2062）のみ綴合可能。
- ※ 2 蒋玉斌 2010b：第 92 組 / 誤綴合。【四】は綴合可能だが、合集 22078 とは綴合不可能。
- ※ 3 謝湘筠 2007・第 16 組：合集 22467 を分割。
- ※ 4 R44547 は合集 22187+殷綴 411（綴合：巖一萍 1989）～合集 20861（乙編 385【自組小字類】）の遙綴だが、距離が離れており綴合可能か判断しえない。ZR44547 に従う。
- ※ 5 R29480=乙編 1916、乙編 2824、乙編 4311、乙編 4318、乙編 6860、乙編 7760（合集 22121）の遙綴だが、本片以外は全て竇組であり、従うことはできない。
- ※ 6 R32290=合集 22091 甲～合集 13707 だが、後者は竇組であり、なおかつ該当部分に実綴可能な他の甲骨があるので、従うことはできない。
- ※ 7 【十六】と【83】=ZR28128 を分割。
- ※ 8 蒋玉斌 2006a、蒋玉斌 2011、『拼五』：「2004 年～2017 年甲骨新綴号碼表」はいずれも乙補 5573 とするが、実際は乙編 5573（R39017）。

村北・村中	98
村南	65
花南	1
出土坑不明	76
合計	240

亀甲	188
獸骨	21
材質不明	31
合計	240

（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員）